ヴェレダ（WELEDA）について

シュタイナー遺稿管理アーカイブ出版物

第118/119号（1997年夏）より

(D18・D19)

序文（W. クーグラー）

シュタイナー
・講義録「身体的疾患と宇宙的法則性」
・ヨゼフ・ファン・レールのために書き記した
「私たちの「覚書」の導入に関する短いスケッチ」

ユルグ・ヒンメルスバッハの論考
「ヴェレダとその治療薬の誕生：
その原理の基礎づけ―未来へのプログラム」

「ルドルフ・シュタイナーとヴェレダの創設」

編集・構成：アレクサンダー・リュッシャー
共同調査：アドリアン・ゴンツェンバッハ、ウラ・トラップ

ヴェレダはどのようにして創設されたのか？
ヴェレダはどのような企業から誕生したのか？
ヴェレダはどのような方法で諸事業を買い取ったのか？
ヴェレダの名称はどのようにして決まったのか？
〔ヴェレダ（WELEDA）の名称の由来〕
〔海外における社名を巡るトラブル（改名への引き金）〕
〔親会社への「ヴェレダ」の命名〕
〔歴史上の「ヴェレダ（Weleda）」〕

神秘学遊戯団

ヴェレダ（WELEDA）について

シュタイナー遺稿管理アーカイブ出版物
第118/119号（1997年夏）より

シュタイナーには全集（GA)以外に、
「寄稿（Beiträge）」として
「Heft」（遺稿管理アーカイブ出版物）があるが
その第118/119号（1997年夏）は
シュタイナーとヴェレダの創設がテーマとなっている。

主な構成と内容は以下の通り。

以下から、

1）序文（W. クーグラー）

「ヴェレダ。人間と社会有機体の健康回復のための共同行動」

ヴェレダの前史・創設期が概観され、
精神と自然・経済・社会の統合を目指した
実験的取り組みとして位置づけられる。

Futurum AG（スイス）とDer kommende Tag AG（ドイツ）という
2つの経済団体から生まれた経緯や
インフレや政治的不安定の中での苦労、
クリニックとラボの分離の必要性などについて論じられ、
その際に、シュタイナーが中心的な指針を与え、
医師・化学者・経済家らが協力した
「精神と金の分離」の試みとして描かれる。

2）ルドルフ・シュタイナーのテキスト

①講義録「身体的疾患と宇宙的法則性」
　1903年10月27日ベルリンでの講義（GA88）

疾患がカルマ的・宇宙的（月の知恵の過剰など）な文脈で説明され、
惑星進化段階と関連づけられている。

②ヨゼフ・ファン・レールのために書き記した
　「私たちの「覚書」の導入に関する短いスケッチ」（1924年1月）

アントロポゾフィー医学の基礎となる人間観と、
疾患・治療の考え方が簡潔にまとめられている。

3）ユルグ・ヒンメルスバッハの論考

「ヴェレダとその治療薬の成立：
その原理の基礎づけ―未来へのプログラム」

シュタイナーの医学コース以降の治療薬開発（植物・鉱物・動物由来）、
複合製剤への展開、未来志向のプログラムとしての意義が論じられる。

4）アレクサンダー・リュッシャーによる記事
（Adrian Gonzenbach、Ulla Trapp 共同執筆）

「ルドルフ・シュタイナーとヴェレダの創立」

・ヴェレダはどのようにして創設されたのか？
・ヴェレダはどのような企業から誕生したのか？
・ヴェレダはどのようにして様々な事業所を取得したのか？
・ヴェレダの名称はどのようにして決まったのか？
・どのような人々が、初期のヴェレダの運命を共に決定づけたのか？
・年代記：ヴェレダ株式会社の戦前・初期の歴史 1912–1925

5）あとがき
「完全に専門知識を持った人々の前で、一度じっくりと語り合えること」

【序文（W. クーグラー）】

「ヴェレダ。人間と社会有機体の健康回復のための共同行動」

序文というものは、その性質上、冒頭に置かれるものです。しかし厳密に言えば、序文とはほぼ常に、結末という体験をあらかじめ前へと引き延ばしたようなものであり、内面的には、逆の順序で対象へと再びアプローチすることでもあります。そのためには、物語の最後の瞬間をすでにしばらく後ろへと残し、その間にあったこと、周囲のこと、そしてその中を通り抜けてきたことのすべてを、一つひとつ本来の場所へと収めていなければなりません。

ヴェレダの前史および初期の歴史への序文を書くこと、それは歴史そのものが自ずとノートに言葉を書き取らせてくれるような課題である――一見すると、そのように思えます。しかし、書き始めた途端、私たちはすでに、いくつもの意味を持つ複雑な名前の網の目に絡め取られてしまいます。「化学・製薬研究所（Chemisch-Pharmazeutisches Laboratorium）」、「国際研究所および臨床治療研究所（Internationale Laboratorien und Klinisch-Therapeutisches Institut AG）」、「フトゥールム（Futurum A.G.）」、「デル・コメンデ・タ―ク（Der Kommende Tag A.G.／来るべき日）」、「イラグ（I.L.A.G.）」などは、ほんの数例に過ぎません。

しかし、これらすべての名称の背後には、一つの全体的なプログラム、すなわち、多くの企業の創業期を特徴づけるあらゆる紆余曲折や混乱を伴った、独自の歴史が隠されています。プログラムとして、ここでは極めて多くの、そして多様な事柄が扱われています。精神科学と自然科学を再び近づける可能性としての融点、人間の健康と社会有機体の健康との間にある親和性、そして最終的には、偏頭痛、発熱、脱毛症などの場合における具体的な医療・衛生面での救済です。総じて、私たちがここで向き合っているのは、近さと遠さ、精神と物質、感覚的なものと非感覚的なもの（超感覚的なもの）の「（錬）金術」であり、同時に社会的関係、技術的ノウハウ、資金、そして市場の「（錬）金術」でもあるのです。

当時の先駆者たちにとって、進むべきでないほど遠い道はなく、小さな一歩を積み重ねて取り組み、評価するに値しないほど大きな課題もありませんでした。

本冊子のために蘇らされた数々の出来事は、単なる過去のものにとどまろうとする意志、すなわちあらゆる「歴史主義」に強く抗っているように見えます。常に自発的に選ばれたわけではなく、時として内外の諸事情から求められたその「変化への適応力（変容能力）」こそが、あの創業期の主要な特徴です。そして同時にそれは、関係者たちを日々の山積する問題の茂みの中へと目的意識を持って導いた、「精神的（霊的）な世界観・宇宙観」の容認という背景があって初めて考えられる力でもあります。

あの最初期の数年間に一度は有効性とされたものや優先事項だったものが、次の瞬間にはもはや単なる些細な一事に過ぎなくなっていました。例えば、長きにわたり次のような考え方が決定づけていました。それは、医薬品の研究所、製造、そして販売は、医療や治療の現場と組織的に直接かつ密接に結びついていなければならない、というものです。しかし数年後、経験が教えてくれたのは、資金と精神、あるいは製造・販売と本来の治療活動は、どうしても切り離さなければならないということでした。

とはいえ、単に一つの「モデル実験」を立ち上げたかったわけではなく、直接現実に――それも局所的・地域的にではなく、国際的に、世界規模で――介入し、現実そのものを自ら形づくろうとしたことこそが、あらゆる歳月を通じて一貫していた駆動の原動力でした。

あの歳月の年代記を読む者にとって、これらすべてをすぐに把握できるとは限りません。シュトゥットガルトとシュヴェービッシュ・グミュントの間で行き来が落ち着いたかと思えば、すでにすべての出来事はスイスの小さな村アルレスハイムへと集中し、それから間もなくして、スカンジナビア、イギリス、あるいはアメリカへと新たな拠点を定めていくのです。

実に多様なアイデア、全く異なる生活や仕事の背景から集まってきた関係者たちの多様性、必要性に応じて次々と新しい機関を設立しようとするほとんど抑えきれないほどの意志、無数の財務取引、技術的な設置や実験。これらすべてはあまりにも複雑で、あらゆる事柄をひと目で即座に把握し、整理し、理解し、ましてや最終的な評価を下すことなど到底できません。

後に残るのは、果てしない驚きです。なぜなら、一見して不可能でユートピア（空想）と思えるようなことが、それにもかかわらず具体化できるのだということこそが、今日の「ヴェレダ」の名のもとに世界中で医療・衛生供給へ重要な貢献を果たしている企業の、創業期の歴史から導き出せる要約のようなものだからです。さらに、この歴史からは、同じように大胆な試みに身を投じているすべての人々への「励まし」となる何ものかが放たれています。

名前が常に表舞台に出ているわけではないにせよ、あの歳月の出来事の中心にいたのは、何よりもルドルフ・シュタイナーでした。彼はある時は背景から、またある時は最前線に立って開発を前進させ、その方向性を検証し、幾度となく軌道修正を行いました。そこには、いかなる場所、いかなる時間にも「停滞」はありませんでした。

そして彼の周囲には、ある意味でヴェレダの前史および初期の歴史における「考古学者」であり「先見者」とも言える、活動家たちの集団がいました。医師、薬剤師、化学者、製薬者、経営幹部や会計士、研究助手、そして労働者たちです。彼らは実験を重ね、会議を行い、直面する課題に向かって夜を明かしました。常に新しいアイデアが生まれ、交換され、成功や失敗を伴う実験が行われ、定款や規約が起草されては再び破棄され、会社が設立されてはまた解散されました。彼らは互いからエネルギーを吸収し合い、時には自分自身を、あるいは互いを消耗させ尽くしたのです。

この最初期において、株主たちもまた重要な役割を果たしていました。彼らの経済的・精神的な営みへの信頼は、幾度となく極限まで試されることとなりました。しかし、関係者たちの思想と多大なる労働への献身の力によって、その信頼の大半が衰え果てることはありませんでした。それは、様々な企業内で解散や破産寸前の事態を招いた幾度もの新たな挫折に直面しながらのこと、そして、不安定さ、インフレーションとデフレーション、政治の停滞、過激化、そして無力感に特徴づけられる、極めて緊迫し荒廃した一般的な経済的・政治的状況下でのことでした。

ヴェレダの前史および初期の歴史は、同時に「精神的および経済的価値の促進」を掲げた2つの企業――ドイツの「デル・コメンデ・タ－ク（Der Kommende Tag A.G.／来るべき日）」とスイスの「フトゥールム（Futurum A.G.）」、そして最終的にはスイスに拠点を置く第3の企業「国際研究所および臨床治療研究所（Internationale Laboratorien und Klinisch-Therapeutisches Institut A.G.）」――の、紛れもない現実の歴史の一部でもあります。これらすべての企業において、ある種のものが響き合っていました。それは、人智学運動（アントロポゾフィー運動）の内部において、これほどの密度と集中、そしてこれほどの規模では二度と実現不可能だったものであり、後のヴェレダの姿を見据えれば、要するに「人間と社会有機体の健康回復のための共同行動」であったと捉えることができます。「社会有機体の三分節化」の思想、特にその中における「アソシエーション（協同）の思想」に基づき、社会問題の解決へと直接的にアプローチすること。その一方で、新しい医薬品の開発・製造・販売、ならびに臨床治療研究所の設立を通じて、健康医療の分野に人智学的な人間認識を具体的に落とし込んでいくこと。これらこそが、現代の言葉で言えば、当時の「企業の経営理念（ミッション）」だったのです。

ヴェレダ株式会社（Weleda A.G.）の創設期の描写に加え、ここではルドルフ・シュタイナーによる2つのテキストに注目していただきたいと思います。一つは1903年10月27日にベルリンで行われた講義であり、もう一つは、1924年にルドルフ・シュタイナーがヨセフ・ヴァン・レールのアメリカへの旅に持たせた「覚書」のスケッチです。ヴァン・レールは医療に関しては専門知識がないと感じていたものの、合衆国での販売活動にあたって、相応の指針を必要としていたために書かれたものです。ここで特に重要なのは、とりわけその最後の数行です。ルドルフ・シュタイナーはいくつかの場面で単に古い処方を焼き直しただけだと幾度も主張する専門家たちに対して、これは特に重要な意味を持ちます。「確かに彼は部分的にそうしたかもしれない」と反論することはできますが、この手法の背後には明確な意図がありました。シュタイナーは覚書の中で次のように述べています。「ゲーテアヌムの製薬研究所が推奨する医薬品は、合理的かつ厳密な医学的思考様式の成果である。使用されているものの中には、すでに世にあるものと類似しているものもある。そこでは、この新しい思考様式が、なぜその薬が効くのかという必要な洞察をもたらしている。しかし、その大半は新しい医薬品である。なぜなら、それらの健康回復効果は、ここにスケッチされた、人間の本質に関する新しい医学的認識（人智学医学）によってはじめて明らかになるからである。」

これらの言葉の背後、そしてその内部には、極めて高い要求を伴う課題が隠されています。その深い中身を汲み尽くし、最終的にそれを製薬および医療・治療の実践のレベルへと変換するには、最高度の専門知識、集中力、細心の注意、そして協調（コーペレーション）が必要とされます。最初期においてこの課題にどのように取り組み、どのような成果が得られたのかについては、ヴェレダ社の薬剤師であるユルグ・ヒンメルスバッハ氏による繊細な寄稿文に記されています。同氏は、様々な講義の基礎となった自身の原稿を、今回の寄稿のために提供してくれました。これを読むことで、この分野ですでにどれほど多くのことが成し遂げられてきたかが明らかになると同時に、人智学的な「治療芸術」がいまだどれほど多くの開かれた可能性をその内に秘めているか、そしてそれが最終的にいかに丸ごと「未来へのプログラム」であるかを、読者は明確に理解することができるでしょう。

本冊子では、表目的にはヴェレダの前史および初期の歴史が辿られています。しかしその一方で、ここに収められた様々な描写は、精神的（霊的）な活動活動）と経済的な活動との結びつきといった、その背景への洞察も与えてくれます。これにより、社会有機体三分節化運動の歴史の極めて重要な一幕が記録されると同時に、人智学医学運動や医療セクションの端緒、さらにはアルレスハイムの「ゾンネンホーフ」における治

療教育活動の始まりまでもが追体験できるようになるのです。これは一見すると、副産物のように思えるかもしれませんが、決して「取るに足らない二次的な事柄」ではありません。

「精神科学者（霊学研究者）の仕事現場をのぞき見る」――アレクサンダー・リュッシャーが、ルドルフ・シュタイナーの創始した研究所運動について緻密に記録したこの「日記」には、そのような見出しがふさわしいかもしれません。ルドルフ・シュタイナー遺稿管理アーカイブの正規職員となって間もない彼は、貴重なディテール（細部）や、一見すると把握しきれないほど広大な文脈を確かな目で見極め、忍耐強く、そして常に新たなモチベーションを保ちながら、多様で、時にはほとんど判読不可能な過去の足跡を追い続けました。また、アドリアン・ゴンツェンバッハによる調査も彼を支え、全体を構成するための多くの重要なピースをもたらしてくれました。そうして最終的に浮かび上がった全体像は、実に包括的なものですが、それ自体で絶対的な完全性を主張しようとするものではありません。

今回もまた、お馴染みの手法でウラ・トラップがその優れた直感と豊かな知識を遺憾なく発揮してくれたおかげで、編集者（筆者）に残された仕事といえば、この印象深い歴史の数々を消化し、まさに今書いている、いわば「前倒しされたあとがき」としての序文を執筆することだけでした。

ヴァルター・クーグラー

【シュタイナー講義録「身体的疾患と宇宙的法則性」

（1903年10月27日ベルリンでの講義（GA88））

次のような質問がなされました。
「カルマの結びつきにおいて、なぜ不完全なもの、悪、苦痛、そして病気が存在するのでしょうか？ 慈愛に満ちた人間の精神（霊）という思想によっても、カルマの均衡はもたらされるのではないでしょうか？ 罪を赦してくれる神という思想のほうが、厳格で公正な神という思想よりも、私たちにとって身近に感じられるのですが。」

これらの質問に対しては、次のように答えることができます。
［神智学的な観点から示されるような］私たちの神の概念には、個々の個体が時間の経過とともに自らの最高の完全性へと導かれるという、明確なイメージが含まれています。それも、何か漠然とした方法で導かれるのではなく、一定の進化の道を歩むことによって神聖なる最終目標へと到達するようになっているのです。

私たちの宇宙において、私たちは7つの惑星的進化段階を扱っています。すなわち、土星、太陽、月があり、次に地球が来ます。その後、地球は次の進化段階である第5の段階へと移行し、さらに第6、そして最終的に第7の段階へと向かいます。これら7つの惑星的状態のうちの3つ、すなわち月、地球、そして未来の惑星である木星については、私たちはある程度のイメージを持つことができます。私たちの惑星である地球を、私たちは「愛の宇宙」と呼び、その次に続く木星を「火の宇宙」と呼びます。そして、その前にあった惑星的状態である月紀には、「叡智の宇宙」を見るべきなのです。

現在の地球状態における最高に進化した存在を、私たちは「愛と慈悲のマイスター」と呼びます。これに対し、「叡智のマイスター」［注1］は、月進化（古月紀）における最高に進化した存在でした。彼らは、宇宙のカルマの力から人間の諸器官が知恵に満ちた形で構築されるよう導き、例えば、適切な時期に空腹や渇きが生じるように整えたのです。

仮に、これらの「叡智のマイスター」が現代の私たちの時代に現れるとすれば、彼らは過剰な叡智を（過去から）携えて渡ってくることになります。考えてもみてください。ピアノ調律師（製造者）は作業場（工房）でその仕事を果たさなければなりません。もしコンサートホールでその作業を始めれば、災難（不協和

音）をもたらすだけでしょう。このように、全く同じ活動であっても、ある場所では善となり、別の場所では悪となり得るのです。

これはまさに、これら「叡智のマイスター」にも当てはまります。彼らは過剰な知恵を持っているため、結果としてこの地球上に災難をもたらすことになります。それはちょうど、ピアノ調律師が音楽室で災難をもたらすのと同じです。

もし「愛と慈悲のマイスター」が、私たちの地球からあまりにも多くのものを次の惑星的進化段階へと携えていってしまうなら、彼らは一種の「影の兄弟（黒魔術師）」のようになってしまうでしょう。なぜなら、次の時代（木星紀）は、マナス（Manas／霊我）の要素をブッディ（Budhi／生命霊）のレベルへと高め、浄化するという課題を持っているからです［注2］。

これら浄化されたすべてのカルマの感情は、やがて一つの大きな力へと合流し、私たちの惑星を貫き、満たしている「根源の精神（霊）」へと向かっていきます。現代の人間が感じているすべてのことは、次の進化段階において、浄化された形で炎のように合流します。そして、これら無数の個々の炎が結びつき、一つの全体的な火となるのです。だからこそ、人間の心の浄化された感情が調和をもって響き合うことで形成されるこの惑星は、「火の宇宙」と呼ばれるのです。

この「火の宇宙」と私たちの地球宇宙との関係は、地球宇宙とその前身（月紀）との関係と同じです。本質的なものは、まず叡智を通り抜け、次に愛を通り抜け、そして最終的には火の中で昇華されなければなりません。これこそが、宇宙を貫き流れる「根源の精神」が目指している目標です。

根源の精神は、人類にあらゆる中間段階を体験させようとしています。人間は単に不特定の完成へと至ればよいわけではなく、存在の豊かさを体験するために、個々のすべての段階をくまなく経ていかねばならないのです。もし時間と空間の中に「多様性」が存在しなければ、これらの中間目標は達成され得ないでしょう。空間においては、様々な存在の段階が並んで存在しています。しかし時間においても同様に、諸存在は次々と連続して生き、様々な時代、様々な段階を通り抜けていくのです。このようにして、根源の精神は時間と空間における多様性を目指しています。それは、諸存在が自分自身を通じて完成へと歩むようにするためであり、諸存在に個々のレッスン（学び）を実際に経験させるためなのです。

したがって、カルマというものは、一方の「完全なもの」が、他方の「不完全なもの」に対応するという形でしか作用できません。例えば、一人の子供が将来大人になることを見据え、自らを高めて進化していく様子を思い浮かべてみてください。子供はまず、すべてを学ばなければなりません。立ち方、歩き方を学び、自らのバランスを保つことを学ばねばなりません。その過程で、子供は何度も転ぶことになります。もし、転ぶことに何の痛みも伴わなかったとしたら、転ぶという経験は、能力を完成させる方向へのいかなる効果も持たないでしょう。

自らを完成させるためには、人生の中に「不完全なもの」が存在していなければならないのです。一つの事実に別の事実が結びついていることで、最初の事実が私たちにとってのレッスン（教訓）となり、私たちに何かを教えてくれるようになります。神智学（人智学）が私たちに示しているのは、このことです。

私たちの惑星のすべての中間段階は、私たちが最高度の階梯へと上昇するための「学び（経験）」なのです。それゆえ、私たちは人生を一つの学びのプロセスとして捉えねばなりません。神聖なる根源の精神は、私たちが人生からできるだけ多くのことを学べるように、その機会を与えてくれているのです。単に「罪を赦すだけの神」であったなら、私たちが学ぶことを妨げてしまうでしょう。

あらゆる行為は、認識の源泉となります。もし、振り子が一方の側へと振れることに連動して、もう一方の側への振れが生じるようになっていなければ、行為が認識の源泉となることはないでしょう。私たちが創造主の手によって操られるマリオネット（操り人形）のようにならないためには、振り子が双方向へと振れる

ことができる、ということが必要なのです。私たちの進化の特定の段階においては、人間の生活の多様性のすべてが現れるわけではないため、別の段階において、あたかも振り子が反対側へと大きく振れるかのような事象が現れなければならないのです。

さて、ここには身体的疾患というものが存在します。私たちは基本的に、肉体の病気の起源を通常の思考では理解することができません。事故や不意の出来事が身に降りかかることは理解できます。しかし、何の事故も起きていないのに、私たちの身体が単に内側から自ずと病気になるということは、私たちがそう簡単に理解できることではありません。

オカルティズム（神秘学）において、「影の兄弟」は、内側から作用する悪性の病気の媒介者としても見なされています。そして、外部からの明らかな原因なしに発生する肉体の病気の「宇宙的・カルマ的起源」もまた、これと同じ方向性に見出すことができるのです。

誤った場所における「過剰な叡智」によって、悪への逸脱が生じます。これが肉体レベルにおいては、「叡智のマイスター」たちによる諸器官への強すぎる介入を意味しているのです。彼らは本来、叡智のみを扱うべきであり、現在の地球状態（地球紀）においては、諸器官の肉体的な領域にまで深く入り込むべきではありません。まさに（先述の比喩の）ピアノ調律師と同じように、叡智のマイスターたちが、かつての進化段階において正当に行っていたことと全く同じことを現在の地球で行うとき、彼らは「肉体の病気の創出者」となってしまうのです。この、いわば「自らを過剰に反転させてしまう叡智の原理」こそが、肉体的な悪（病）の起源なのです。

私たちの「愛と慈悲と慈愛の宇宙」に先立って存在していたのは「叡智の宇宙」であり、そこでの諸存在は、みずからの活動を肉体の形成へと捧げていました。彼らがその活動を、現在の私たちの宇宙にまで引き延ばして継続していること、それこそが病気を引き起こしているのです。諸々の病気、すなわち肉体的および道徳的な悪（禍い）は、この共通の起源へと遡ることができます。これこそが、オカルト的な歴史研究（霊視的な歴史探究）から私たちに明らかになる事実なのです。

私は、私たちの時代が唯物論的な研究を通じて、なぜ神智学（人智学）による精神化（霊化）を必要とするに至ったのかを示してきました。西欧の科学は神智学の門前まで到達し、今まさにその扉を叩いています。なぜなら、科学はそれ自体の力だけでは、満足のいく解決策を見出すことができないからです。

例えば、ロンブローゾの研究それ自体は正当なものです。彼の研究においては、肉体的なものと精神（魂）的なものとが極めて密近に引き寄せられています。彼は犯罪者において、病気と肉体的な異常性をいかに近づけて捉えていることでしょう。ロンブローゾは犯罪者たちの中に、純粋に肉体的な異常性や身体の不規則性を見出しました。彼は頭蓋骨を測定し、非対称性や異常性を探し求め、「道徳的な過失が存在する場所には、肉体的な不調和もまた見出される」と述べています。このようにして、彼は道徳的な病と肉体的な病を非常に近づけたのです。

こうして物質科学は、オカルティズム（神秘学）もまた行き着くような確信へと到達します。しかし神智学（人智学）が知っているのは、道徳的および肉体的な病気の場合、それは「月の時代（古月紀）」が私たちの「地球の時代（地球紀）」へとカルマ的に侵入してきている現象なのだということです。これらは、肉体（物質世界）への深すぎる進出において表面化してくる、宇宙的・カルマ的な作用なのです。

さて、これで霊視能力を持つ人々が、なぜそのような能力を持たない人々とは全く異なる医師になり得るのかが理解できるでしょう。「月の時代（古月紀）」の間、当時起きたすべてのことは、今日よりもはるかにアストラル的なものへと近づいていました。アストラル的な諸力はより活発で、より流動的であり、はるかに強力だったのです。

それゆえ、アストラル的な霊視者は、私たちの世界と月の時代との間に存在する結びつきを追うことができます。彼は、肉体的な作用の中からアストラル的な原因の中へと視線を向けなければなりません。私たちは、これを一つのイメージ（比喩）として思い描いてみる必要があります。

仮に、アストラル的なものがかつて「水」であり、それが現在は「氷」へと凍りついていると想像してみてください。そうすれば、その氷の中に、かつてそこに存在したすべてのものを見ることができます。

このような霊視能力を持っていたパラケルススのような医師は、通常の医師には理解できない非常に多くの治療プロセスを見出すことができました。彼は自らの霊視によって、肉体における病気の原因を「見極める（媒介する）」ことができたのです。すなわち、先行する進化の時代（過去の惑星期）における病気の原因を見る能力がありました。

パラケルススは、「地上の人間（肉体としての人間）を治療するだけでなく、星辰人をも治療しなければならない」と言いました。これを私たちの言葉に換言すれば、「人間のアストラル体（星辰体）をも治療しなければならない」ということです。パラケルススは、自分が使用する肉体的な（物質的な）医薬品の作用と病気の原因との関係性を見通しており、同時にその医薬品がもたらす効果をも見通していました。通常の医師は、実験を通じてのみ、その効果を見出すにすぎません。

このように、地球上で不完全なものとして現れる事象も、かつては正当だった（過去の進化段階の）「叡智」が私たちの時代へと侵入してきた結果として捉えるとき、私たちにとってもはや不完全なものではなくなります。私たちの時代において完全なものであることも、過去の、あるいは未来の時代においては不完全なものとなり得るのです。

〔編者注〕

［注1］
ここでは、エソテリック（神秘学・秘教）の文脈で語られる「知恵と感情の調和のマイスター」とは、明らかに別の存在（霊的存在）のことが意味されている。これについては、『ガイスト（精神）の寄稿（BEITRÄGE）』第67～72号および第78号に収められている「惑星的進化」に関する講義録を参照。

［注2］
「……この次の時代は、マナス（霊我）の要素をブッディ（生命霊）のレベルへと高め、浄化するという課題を持っているからです」について：
当時の聴講者たちにとって馴染みの深かったこれらのインド・神智学的な表現は、ルドルフ・シュタイナーが1904年に出版した著書『神智学（Theosophie）』以降、もはや使用されなくなりました。書物『神智学』の用語に当てはめるなら、この箇所は次のように表現されることになります。
「……この次の時代は、霊我を生命霊へと浄化するという課題を持っているからです。」

【ルドルフ・シュタイナー
私たちの「覚書」の導入に関する短いスケッチ】

（［ヨセフ・］ヴァン・レールのために書き残されたもの（1924年1月））

I.　私たちの新しい医学的方法は何を目指すのか？

ここで世界に向けて発表される新しい医学的方法は、人間に対する認識の仕方が異なるという点で、従来の医学的方法とは一線を画しています。近世の自然科学的観点から形成されてきた従来の医学的方法は、肉体

組織を解剖し、思考のなかでそれを再び組み立て直すことによって、人間に関するすべての認識を得ようとしています。

しかし、人間は単なる肉体組織にすぎないわけではありません。それと同時に、「超感覚的な組織」でもあるのです。この超肉体的な組織は、人間の魂的・精神（霊）的な体験や活動のなかに現れてきます。ちょうど肉体組織が魂的・精神的なものの基礎となっているように、魂的・精神的なものは肉体組織を形づくり、そこに生命を吹き込む存在なのです。

この事実に対する洞察がなければ、健康な人間の有機体についても、病める人間の有機体についても、真の認識を得ることは不可能です。

それゆえ、この新しい医学的方法は、人間に対する肉体的な認識に、超肉体的な認識を付け加えます。その本質は、次のような洞察に達することにあります。すなわち――もしそれらが「精神（霊）的なもの」として肉体的なものから比較的隔離された状態で人間の有機体内で展開するならば、人間の真の本質を表すことになる「諸過程」が、ひとたびそれらの肉体的なものと不適切な形で結びついてしまうと、直ちに肉体への損傷や害悪になってしまう、という洞察です。

人間の肉体組織は、魂的なものや精神的なものの「担い手」となるにふさわしい状態を保つ方向へと進みます。しかし、肉体組織は、これらの魂的なものや精神的なものと、適切な度合いを超えて結びついてはならないのです。もしそのような過剰な結びつきが起きてしまったとき、人間は病気になるのです。

人間が病気に罹るリスクに晒されているということは、人間が精神（霊）的・魂的な存在であり得る理由と、全く同じ根拠に帰せられます。肉体のなかに現れる精神的なものを観察することによってのみ、病気の本質という認識に到達することができるのです。

肉体組織において、異常なプロセス（病理の過程）は、単に「変化」としてしか認識されません。そしてその変化は、正常なプロセスと全く同様に、自然の法則に支配されているものなのです。それらが「病気という特有のプロセス」であることを認識できるのは、肉体的なものから超感覚的なものへと移行できるときに限られます。なぜなら、極めて逆説的に聞こえるかもしれませんが、人間の肉体組織のなかの何かが、精神的なものへと強く傾きすぎて発達してしまったときに、人間は病気になるからです。

そして、このような病気に対する認識からのみ、真の治療法が立ち上がります。なぜなら、人間の外部にあるあらゆる物質やプロセスは、人間に対して一定の関係性を持っているからです。

このような人間外部の物質やプロセスを人間の内側へと取り入れると、人間の外部で「肉体（物質）的」に作用していたすべてのものが、人間の内側では「超感覚的」に作用するようになります。これとは対照的に、人間の内側で「肉体（物質）的」に作用しているすべてのものは、人間の外部（自然界）においては「超感覚的」に作用しているのです。

人間と外部世界との関係性を真に認識できていれば、人間の内側における超肉体的なものと肉体的なものとの「不適切な関係」に対して、その関係性を「適切なもの」へと転換してくれる物質やプロセスを、人間外部の世界（自然界）から常に一対一の対応関係として見出すことができます。しかし、このような認識は、人間の超肉体的な領域への洞察があって初めて可能になることなのです。

人間の本質における「超肉体的なもの」への認識を欠いた治療法は、一種の幻想にすぎません。事実がそうであるからこそ、肉体的な人間にのみ立脚しようとする、現在普及している近代の医学的方法は不十分さを免れないのです。

肉体（物質）科学は、生命のないテクノロジーの基礎としてのみ有益です。しかし、治療法が必要としているのは、精神（霊）へと向かう科学なのです。ここに推奨される医学的方法は、まさにそのような科学を提供しようとするものです。この方法の本質は、肉体的および精神的な人間認識に基づいた医薬品を届けることにあります。そして、この認識を通じてのみ、物質やプロセスの持つ「治癒力」を正しく認識することができるのです。

これらの医薬品を検証する際、病める人間の有機体がその影響のもとでどのように変化していくかを目にすることになるでしょう。そしてそれを通じて、これらの医薬品への確固たる信頼を獲得することになるはずです。

※［ルドルフ・シュタイナーによる注記］
ここでは人間についてのみ語られるべきである。確かに、動物の有機体を観察することによっても、人間の有機体について多くのことを知ることができる。しかし、ここではそのような経験について、差し当たり一切考慮に入れないものとする。

II.　新しい（人智学的）方法における病理学と治療法新しい医薬品の本質

人間の有機体のなかで起きている諸プロセスは、人間外部の自然界におけるプロセスとは同一ではありません［注］。それゆえ、自然界のプロセスと同じ方法で人間のプロセスを知ることは不可能です。人間が「死体」となって初めて、五感による観察とそれに基づく悟性の働きによって認識できるものと全く同じプロセスが、その内側で進行するようになります。人間が生き、感じ、考えている限り、人間はみずからの有機体を単なる自然のプロセスから絶えず引き離し、奪い取っているのです。人間の内側では、外部の自然認識（唯物論的科学）では決して捉えることのできないプロセスが進行しています。

外部の自然認識を「唯一可能な認識」と見なすことは、人間の本質への洞察を放棄することを意味します。しかし、この外部の自然認識に対して、もう一つの認識を対置させることができます。それは、人間の魂のなかで発達させるべき「精神的（霊的）な直観」に基づいています。この直観のための能力は、日常的な人間の本質のなかに休眠状態で眠っています。それはちょうど、成人期になって現れる魂の諸力が、まだ非常に幼い子供のなかに眠っているのと同じです。

人間が鍛えることのできる最初の能力は、「思考能力」と「記憶力」です。訓練によって筋肉の力を増強できるのと同じように、訓練によってこれらを純粋に精神（霊）的に高めることができます。全く明晰な思考に対して、内面的に幾度も集中することによって、この状態へと到達します。これを通じて、人間本質の深層から思考へと力が送り込まれるようになります。

ただしその際、すべての注意を「内的な思考活動そのもの」へと向けなければなりません。外部世界の事物やプロセスを模写するために思考を持つのではなく、すべての内的な力をもって「思考のなかで生きる」ために思考を持たねばならないのです。

そうすると、かつてはそれ自体の中に何も持たず、それによって外部の自然からの印象を内に受け入れることができるようにするために、潜在意識の深淵へと沈み込ませていた「ある力」が、内なる人間本質の方から思考へと流れ込んでくるのを体験することになります。

この、かつて沈み込んでいた力を、人は内的な体験のなかで再発見します。思考は、ちょうど筋肉の力のように人間を満たす何ものかへと変化します。人間は、自身のなかにもう一人の「第二の人間」を感じるようになるのです。

この「第二の人間」をひとたび内面的に体験すると、人は全宇宙のなかに「第二の世界」をも体験したことになります。ここではそれを「エーテル界（ ätherische Welt ）」と呼ぶことにします。

人間は、みずからの肉体組織（物質的組織）をもって物質界のなかに存在しているのと同じように、このエーテル界のなかにはみずからの「エーテル組織」をもって存在しています。しかし、このエーテル的なものには、物質界とは全く異なる法則が働いているのです。

人間が栄養摂取によって体内に取り入れる物質は、純粋に肉体（物質）的な自然へと移行する過程にあるか、あるいは最初から純粋な物質的物質（例えば食塩など）です。しかし、人間が植物界や動物界から摂取するものもまた、純粋な物質的なものへと向かう過程にあります。それらは溶解され、加熱されるなどして、純粋に物質的なプロセスに晒されるからです。

人間のなかにあるこの純粋に物質的なものは、「再活性化（Wiederbelebung）」への道を歩み始めねばなりません。それは、物質がエーテル組織の働き（新陳代謝や同化作用）のなかに受け入れられることによって行われるのです。

エーテル組織のなかでは、純粋に肉体（物質）的な作用は消失します。成長や栄養摂取などは、超肉体的なプロセスであり、エーテル組織によって管理され、営まれているのです。

人間の有機体が、自身のエーテル的な部分において、物質的な諸力を十分に変換できるほど強力であれば、その人は「健康」です。しかし、そうではない場合、すなわちエーテル組織が弱すぎる場合には、人間は「病気」になります。そのとき体内には、人間外部の自然界においては正当であっても、人間の内側においては「異物」として存在してしまう物質やプロセスが残ることになります。人間のなかに生じたこの「異物」を正しく見極めることこそが、医学における「病理学的」な領域です。もし有機体が、自力でこの上述の変換を行うことができないのであれば、外部からの医薬品によってサポートを施さなければなりません。

これがどのようなケースであるかを、一つの具体例を挙げて分かりやすく説明しましょう。
いま、エーテル組織が弱すぎるために、ある特定の物質に体内で必要な硬度や一貫性を与えることができないと仮定します。その物質は、骨の形成にうまく組み込まれることで、骨が全生命プロセスと適切な関係性を保てるようにしなければならないものです。しかしエーテル組織が弱いと、骨はそれ自体の本質へと強く引きこもりすぎてしまいます。つまり、骨が自身の生命を有機体全体から奪い去ってしまい、硬化・孤立してしまうのです。

このような兆候を正しい方法で察知し、極めて微量の「鉛」を有機体内へと導入すると、この鉛は、まるでエーテル組織の諸力がまさにそれまで不足していた方向へとピンポイントで強化されたかのように作用します。

人間のなかにあるこの「異物」をいかにして克服し、肉体（物質）的なものの変換を適切な方法で進行させることができるかを見極めること、これこそが医学における「治療学的」な領域です。

しかし、人間の肉体組織に加えてエーテル組織を把握しただけでは、まだ人間を完全に認識したことにはなりません。人間は、思考能力以外にも、さらなる魂の諸力を高めて「精神的（霊的）な直観」へと至ることができるのです。

エーテル界へと通じる、あの「強化された思考」を体験したのち、人は魂の内的な力によって、その思考そのものをあえて抑え込むことができます。通常の生命プロセスにおいては、このような内的なプロセスを経ると「眠り」が訪れます。しかし、訓練を積むことによって、この強化された思考を抑え込んだ際にも、魂が眠りに落ちないように維持することができるようになります。そうすると、外部からは何の感覚刺激も入ってこないにもかかわらず、意識は覚醒状態を保ちます。この意識に対して、真の精神（霊）世界が自らを明らかにするのです。通常の（物質）世界に、もう一つの精神（霊）世界が付け加えられます。

この精神世界において、人は人間の第三の組織、いわば「第三の人間」を認識します。これを「アストラル組織（アストラル体）」と呼ぶことができるのです。

アストラル組織を認識することによって、人は次のようなことを理解するようになります。すなわち、目覚めている意識、あるいは半無意識の生命のなかで生じる「諸器官の感覚」や、漠然とした「生命感覚」、そして有機体全体に対する不鮮明な感受性などはすべて、このアストラル組織から生じているのだということです。空腹や渇き、満腹感、疲労感なども同様に、このアストラル組織に由来しています。

さらに、このアストラル組織は、こうした意識的あるいは半無意識的な状態の単なる「担い手」であるにとどまらず、それは彼の活動の一つの側面にすぎない――すなわち、魂の意識へと向けられた側の面にすぎない――ということも理解されるようになります。アストラル組織のもう一つの側の面は、潜在意識下の有機的営み（生理機能）のなかにまで深く届いているのです。例えば、疲労感を意識にのぼらせるのも同じアストラル体であり、諸器官のなかに生きて疲労そのものを創り出しているのも、まさに同じアストラル体なのです。

しかし、このアストラル的な活動の「二つの側の面」の間には、適切なバランスが保たれていなければなりません。それが可能になるのは、エーテル組織が、アストラル組織の活動と肉体組織の活動との間に、適切な方法で介在しているときに限られます。もしエーテル組織が弱すぎると、アストラル的なものを肉体的なものから十分に遠ざけておくことができなくなります。その結果、アストラル的なものが肉体的なものの中へと過剰に侵入してしまうのです。

人間の正常な生命にとっては、アストラル的なものが肉体的なものから十分に力強く隔てられ、単なる「魂（心）的なもの」としてのみ作用していることが不可欠です。なぜなら、魂的なものが肉体的なものへと近づきすぎて密着してしまうと、肉体における諸プロセスが、人間外部の自然界における盲目的な物質の）ロセスへと近づいていってしまうからです。そうなると、人間の諸器官そのものが「異物」へと変質してしまいます。それはまるで、外部から人間のなかへと侵入してきた「異質なもの」と同じように作用し、弱ってしまったエーテル組織では、もはやそれを変換・同化させることができなくなってしまうのです。

人間は、アストラル組織のおかげで自らの「低次の魂の能力」を授かっていますが、同時にこの組織によって「病気にかかるリスク」にも晒されています。なぜなら、このアストラル組織が特定のケースにおいて肉体組織から十分に分離できなくなり、不適切な方法で肉体組織の中に「異質なもの」を組み込んでしまうからです。

したがって、私たちは、「肉体的なものの中からアストラル的なものを追い出す」ような、人間外部の物質やプロセスを知らなければなりません。そして、その物質やプロセスの中にこそ、まさに私たちは「医薬品」を見出すことになるのです。

それゆえ、すべての治療の本質は、人間の組織における「肉体的なもの」と「超肉体的な（超感覚的な）もの」との結びつきを完全に見通すことにあります。そして、これらの結びつきが異常な性質を帯びてしまったときに、人間外部の自然界の中から、その異常性に拮抗して調和を取り戻させるための手段を見出すこと、これこそが治療のすべてなのです。

有機体における純粋に肉体的、あるいはエーテル的に方向づけられた諸プロセスと、意識がそれに基づいている諸プロセスとの間には、「極性的な対立関係」が存在します。前者の（肉体・エーテル的な）プロセスが強ければ強いほど、後者の意識的なプロセスはそれだけ後退しなければなりません。自らの力と法則性に基づいてそれ自体で活発に作用している「肉体＝有機的なもの」は、意識を抑圧してしまうのです。

意識を担う肉体的な諸プロセスは、意識が発生するためには、それ自体のあり方や法則性のまま継続することはできません。それらのプロセスは「退行」させられ、その内部において「麻痺」させられ、さらにはその固有の性質そのものが「破壊」されなければならないのです。

人が精神的（霊的）な直観（霊視）においてアストラル組織として認識するものは、エーテル組織の働きを麻痺させます。漠然とした半無意識的、あるいは潜在意識的な魂の体験を形づくるためには、エーテル組織に依存している生命プロセスが一段階低く麻痺させられなければならないのです。

しかし、これだけでは人間の組織の全体が与えられたわけではありません。アストラル組織を捉えた精神的な霊視は、さらに先へと進むことができます。そうすると、第四の組織、すなわち「第四の人間」である「自我組織」が、洞察の前に立ち現れてきます。

この自我組織は、アストラル組織がエーテル組織に依存するプロセスに拮抗して作用するのと全く同じように、肉体組織に対して反対の作用を及ぼします。人間の体内では、肉体的な物質が絶えず「生きたもの」として形成され続けなければなりません。これに対応するのが、肉体組織とエーテル組織の活動です。エーテル組織はみずからのプロセスを遂行するにあたり、同時に「固体の形態」として結晶化しようとするものを、「流体の要素」のなかに溶解させていきます。

これに対してアストラル組織は、生命を創り出すエーテル組織の活動を麻痺させます。これは、流体の要素を同時に「気体の要素（空気のエレメント）」へと移行させることによって行われます。この活動の一例が「呼吸プロセス」です。呼吸は、有機体の持つ「生きた流体」を、吸い込まれた空気の「気体」のなかへと携え、それによって流体の生命プロセスを、それが半無意識的あるいは潜在意識的な魂のプロセスの担い手となり得る程度にまで麻痺させるのです。

これらのプロセスに、自我組織」が共同して作用します。しかし、自我組織は、そこで起きるすべての事象をさらに先へと推し進めます。自我組織は、固体（地）、流体（水）、気体（風）のなかで展開するすべてのプロセスを、有機体の持つ「熱の分化（火のエレメント」の中へと浸透させるのです。

有機体の内部で多様に展開する熱のプロセスのなかで、自我組織は絶えずすべての物質的なもの、および有機体のすべてのプロセスを部分的に変容させ、有機体が「自己意識的な魂の生活（自我意識）」の担い手となれるようにします。

この変容（熱のコントロール）を行う力が強すぎたり、あるいは弱すぎたりするときに、病気が発生します。したがって、診断において、自我組織の介入のどこに不具合があるかを見極めることが重要になります。その欠陥は、例えば自我組織全体の弱体化に起因し、それによって自我組織が身体のために十分な熱を処理できていない状態にあるかもしれません。あるいは、ある特定の器官系が、別の器官系を犠牲にして、自我組織から多すぎる、あるいは少なすぎる影響を受けている状態にあるのかもしれません。

これらすべてのケースにおいて、自我組織の働きを適切な度合いへと調整することは可能です。人間外部の自然界における「破壊のプロセス（物質の燃焼や化学変化などのプロセス）」を把握していれば、それを身体へと導入することで、自我組織の働きを補助してくれる物質やプロセスを常に見出すことができます。

例えば、診断によって次のように特定できたとします。「ある特定の器官において、供給されている熱が不足している」。この場合、あらかじめある特定のプロセスを施して「酸素を放出する能力」を持たせた物質（その器官に対して有効に作用する物質）を有機体内へと導入します。これによって、その熱の不足による機能障害を治療することができるのです。

このように、人間の本質における「超肉体的な（超感覚的な）もの」への認識を補助として用いることで、真に合理的な治療法が基礎づけられます。これにより、人間の全有機体における医薬品の具体的な作用

について、厳密な洞察を得ることができるようになります。このような医学的思考様式のなかでは、医薬品を用いた単なる「盲目的な実験治療」はすべて克服されるのです。

　このようにして、ゲーテアヌムの製薬研究所［注3］が推奨する医薬品は誕生しました。これらは、合理的かつ厳密な医学的思考様式の成果です。使用されているものの中には、すでに世にあるものと類似しているものもあります。そこでは、この新しい思考様式が、なぜその薬が効くのかという必要な洞察をもたらしています。しかし、その大半は新しい医薬品です。なぜなら、それらの健康回復効果は、ここにスケッチされた、人間の本質に関する新しい医学的認識（人智学医学）によってはじめて明らかになるからなのです。

〔編者注〕

［注3］ ゲーテアヌムの研究所（Laboratorium am Goetheanum）：
ここで意味されているのは、アルレスハイムにある「国際研究所および臨床治療研究所（Internationale Laboratorien und Klinisch-Therapeutisches Institut A.G.）」、すなわちのちの「ヴェレダ株式会社（Weleda A.G.）」のこと。オスカー・シュミーデル博士（Dr. Oskar Schmiedel）による本来の「ゲーテアヌムの研究所」は、この国際研究所の中に統合された。

ユルグ・ヒンメルスバッハの論考
「ヴェレダとその治療薬の誕生：
その原理の基礎づけ―未来へのプログラム」

1920年以降、ルドルフ・シュタイナーは医師や医学部生を対象とした様々な連続講義（医学講座）のなかで、「人智学的な薬物学」を段階的に発展させ、膨大な示唆を伝えました。これらはのちに、医薬品だけでなく、食事療法製品（健康食品）や化粧品の開発へと繋がっていくことになります。

その際、個々の薬用動物、その器官や分泌物、薬用植物とその各部位、鉱物、そして特に鉱物のなかでも重要な一部会である「金属」について、それらの治療的、予防的、あるいはケア的な使用の観点から、計り知れないほど多くの指示が与えられました。そればかりか、製薬プロセスの手法に関する具体的なヒントも、これらの講義の参加者たちに提示されたのです。

これにより、人智学的な医師たちは、これらの提案や指針を「直ちに実行に移したい」と熱望するようになりました。特に、アルレスハイムとシュシュトゥットガルトにしかるべき臨床病院が設立された後は、特有の人智学的医薬品に対する大規模な需要が生じました。そのため、すでに存在していた研究所は、これらの医薬品の開発・製造へと舵を切るか、あるいは、すでにささやかな規模で製造を行っていた場合はその製造を本格化させることになりました。また、この文脈において、新たな研究所の設立も相次ぎました。

のちに「ヴェレダ株式会社（WELEDA A.G.）」となる、徐々に形づくられつつあった「国際研究所（Internationale Laboratorien A.G.）」の、比較的少人数の製薬の先駆者のグループは――最初はドルナハとアルレスハイムで、のちにはシュヴェービッシュ・グミュントとシュトゥットガルトにおいて――ルドルフ・シュタイナーが残した指示の具体化に取り組みました。これが、この若い製薬企業の医薬品ラインナップの強固な土台となったのです。

この医薬品ラインナップの一部は、いわゆる「単一製剤（Simplicia）」であり、もう一部は「複合製剤（Composita）」です。この複合製剤のうち、ルドルフ・シュタイナーに直接由来するものは、典型的な疾患のための医薬品、略して「典型医薬品（Typenmittel）」として構想されました。ちなみにこの名称は、彼自身が命名したものです。これについては、さらに後述することにします。

ルドルフ・シュタイナーに由来する単一製剤は、すべて人智学的な観点に基づいて見出されたものです。この医薬品の発見プロセスは、他の医学的潮流のそれとは明確に一線を画しています。

・近代の学校医学の薬学が、化学的手法を用いて無数の物質を人工的に合成し、それを細胞培養や単離組織（摘出組織）での実験、動物実験、そして最終的には人間への臨床試験にかけて治療上の適格性をテストするのに対し、

・植物療法が、伝統から植物の治療効果を借りてくるか、あるいは、調製された部位や抽出物を現代の化学分析によってその「有効成分」に基づいて定義しようとするのに対し、

・同質療法（ホメオパシー）が、健康な人間を対象とした医薬品試験を通じて物質の「薬物像」を決定し、そうして「類似の法則」に従って病める人への治療効果を突き止めるのに対し、

人智学医学は、次のような事実から出発します。

すなわち、人間とは、より高次な発達という目標に向かって「段階的な進化」を経てきた存在であり、器官形成の各段階において、自らの下に位置する「自然諸界（鉱物・植物・動物界）」に属するしかるべき存在たちを、自分自身の中から（外部へと）分離させてきた存在である、という事実です。

人間は、自らの持つ「形態形成能力」を保ち続けたことによって、特定の偏った方向へと凝固してしまうのを免れ、それによって進化が停滞してしまう事態を回避することができました。人間は、キリスト教が登場するまでの時代には、この進化を「本能的」に全うしてきましたが、その後の進化のプロセスは、今や人間の「自己責任」へと委ねられているのです。

今まさに述べた事柄から、人智医学における「特有の医薬品発見メソッド」が導き出されます。
ある器官や器官系が病気に罹った際、その医薬品は、かつて進化の途上）同時に誕生したことによって、その病める器官あるいは器官系に対して「特別な親和性」を示してくれる自然界の存在――動物、植物、鉱物――の中から探されなければなりません。なぜなら、彼らはその親和性によって、健康状態が意味しているあの「不安定な均衡」を再び回復させる能力を持っているからです。そもそも「病気」とは、局所的な領域、あるいは人間の全存在に関わる全般的な意味において、この「均衡から脱落してしまうこと」に他ならないからです。

これを具体化するために、人間の全存在の階層的な「構成（分節化）」について、ここで短くスケッチしておきましょう。

自然界の諸存在のなかに位置する「一つの自然存在としての人間」は、思考力によって、他の自然存在の上に自らを高めることができます。これこそが人間の「自由」を構成するものであり、人間が自分自身を観察の対象とすることを可能にしているのです。これにより、人間はまず周囲の世界から自らを切り離し、自己を認識し、自分自身のことを一つの「自我」として語ることができるようになります――これこそが、私たちがシンプルに「自己意識」と呼んでいるものです。

しかし、人間はその進化の歩みゆえに、自らの下に位置する自然諸界の存在たち、すなわち、かつて自分の中から生み出し、いわば自らの発達の足跡として背後に残してきた存在たちと、「共通の親和性」を自身の内に宿しています。

鉱物、植物、動物と同じように、人間もまた、感覚で捉えることのできる「空間的な組織」を持っています。それは測定し、重さを量り、その部位や器官の数を数えることができるものです。動物や植物にも見られるような、より高次の組織がこの空間的な組織を変化させていない限り、この組織は機械的な法則や、化学的な法則に支配されています。人智学を拠り所とする精神科学（霊学）は、この組織に対して「肉体／物質体）」という専門用語を割り当てています。

植物や動物と同じように、人間は空間的な組織に加えて、さらに「時間の中に展開する組織」をも持っています。私たちはこれを、その相互作用のなかに「生命」と名付けている諸プロセスの「原因」として定義しています。成長、形態の変容、新陳代謝、生殖などがこれに属します。人智学において、この組織は「エーテル体（生命体）」と呼ばれています。

動物と同じように、人間はさらにもう一つの組織を持っています。それは、人間を「世界を二つの、差し当たり互いに切り離された部分として体験する存在」にする組織です。その二つの部分とは、一方における五感の「外部世界」であり、他方における感情の「内部世界」です。後者の内部世界は、五感を通じて捉えられた外部世界の体験によって火を灯されます。

これにより、二通りの「因果関係」の結びつきが生じます。一つは、外部世界が私たちの内部世界のなかに感情を呼び起こすという関係であり、もう一つは、内部世界がそれらの感情から私たちを突き動かし、外部世界へと働き返させるという関係です。この二重の因果関係の体験こそが、私たちが動物と共有している「意識」の本質なのです。人智学において、これをもたらす組織は「アストラル体」と呼ばれています。

ここで、人間の四つの構成体についてまとめてみましょう。人間は、「肉体（物質体」「エーテル体（生命体 ）」「アストラル体（感情体）」「自我」の四つの構成要素から成り立っています。

これらの構成要素は、一方における「空間 ― 時間 ― 因果関係 ― 自由」という概念の系列と、他方における「生命のない死んだ物質 ― 生命 ― 意識 ― 自己意識」という概念の系列によって、より詳しく説明することができます。

人間は、最初の三つの構成要素（肉体、エーテル体、アストラル体）を、自らの下に位置する自然諸界の存在たちと共有していますが、人間の本質の核である「自我」は、人間を単なる自然の生き物の上に高めています。

これらの構成要素が、最初の三つの要素が人間の自我に「自由な開花（自由な発展）」の可能性を与えるような形で調和を保って組み合わされているとき、私たちはこの調和した状態を「健康」として感じます。

これに対して、人間の行為や生活態度が、三つの構成要素のうちのいずれか一つが他の二つに対して優位に立ってしまうような状態を招き、それが表面化したとき、私たちはその状態を「病気」として体験します。

この状態がまだ魂的（アストラル的）な領域で推移している限り、人間の自我は自らの思考によって、その状態を意識的に変容させる可能性を持っています。しかし、その調和の乱れ、すなわち三つの構成要素の「動的バランス」の崩れが、機能的（エーテル的）な領域、あるいは肉体的（器官・器質的）な領域にまで沈み込んでしまうと、外部からの治療的な措置が必要となり、最終的には薬物療法までもが求められるようになるのです。

病気の概念をさらに厳密に捉えるためには、病気の原因が主に「意識（アストラル体）」と「生命（エーテル体）」の境界において発生する、という事実を知っておかねばなりません。

人間の「意識」というものは、生命プロセスが後ろへと押し戻される、すなわち「分解・異化プロセス」によってのみ成立するものです。それゆえ健康な人間は、昼間の目覚めた意識体験の後に、「睡眠（眠り）」によって心身を再生させる必要性を覚えます。意識が消失し、アストラル体が（肉体とエーテル体から）引き退がると、植物的なプロセス（自律神経や新陳代謝による再生プロセス）が活発に働き始めるのです。

もし、知的な過度な要求やストレスによる「過剰な覚醒（過覚醒）」によって強すぎる分解プロセスが生じると、人間は健康な睡眠を奪われてしまいます。あるいはその逆に、通常の昼間の生活のなかで、過剰に生い茂る再生プロセスのせいで人間が反対の状態へと沈み込んでしまうと、それは傾眠（うとうとすること）から、ひいては失神（気絶）にまで至る状態を招いてしまいます。どちらのケースも、多様な個人的な現れ方のバリエーションを伴って表面化してくる、根本的な「病像（病気の本質的な姿）」に他なりません。

私たちはここまで、人智学的な観点に基づき、健康と病気の考察を、自然諸界との結びつき（生命のない物質 ― 生命 ― 意識 ― 自己意識）における人間のいわば「垂直方向の四層構造」に基づいて考察してきました。そこでは健康とは、最高次の構成要素である「自我」に自由をもたらすための、下位の三つの要素（肉体、エーテル体、アストラル体）の調和した相互作用であると見なしました。そして、この相互作用のことを、私たちは「不安定な均衡」と呼び、一つの構成要素が他の要素を凌駕して圧倒し始めたときに人間がその均衡から脱落してしまうこと、それこそが「病気の状態」であるとしたのです。

さて、これら下位の三つの構成要素（肉体、エーテル体、アストラル体）の統一性を、機能的な観点からいわば「水平方向」に分節化することによって、この病気の概念をさらに分化させ、厳密に規定することができます。すなわち、「三つの機能系」、つまり「神経・感覚システム」、「リズムシステム」、そして「新陳代謝・運動システム（新陳代謝・四肢システム）」への分節化です。

・第一のシステム（神経・感覚システム）は「頭部」に中心を持ち、そこから神経経路を介して、すべての感覚器官に至るまで身体（肉体性）全体へと放射状に広がっています。

・第二のシステム（リズムシステム）は「胸腔」の呼吸・循環器官（心臓と肺）にその中心を持ち、そこから気管・気管支系や血管系を介して、身体の末梢にまで枝分かれしています。

・第三のシステム（新陳代謝・運動システム）は、一方では「腹腔」の腸管（内臓）に、他方では運動器の「筋肉」にその重心を置いています。そこは最も重要な新陳代謝プロセスが繰り広げられる場所ですが、同時に、あらゆる体液組織（血液、リンパ液、細胞内液・細胞外液）を媒介して身体全体と絶えず交流（交換作用）を行っています。すなわち、何らかの新陳代謝プロセスが行われているすべての身体領域と結びついているのです。

ルドルフ・シュタイナーが、この「機能的三分節構造」を明示的に描写したのは、ようやく1917年になってからの著書『魂の謎について（ Von Seelenrätseln ）』においてでした。ここで、1917年以前の彼の著作におけるこの思想の潜在的な基礎に短く触れ、そこから先ほど述べた「人間の四つの構成体」への橋渡しをすることにしましょう。なぜなら、これら両方の分節法（四構成と三分節）は、人間の健康と病気を理解し、ひいては医薬品の発見や治療法を見出すための、極めて啓発的な視点をもたらしてくれるからです。

ゲーテに倣い、ルドルフ・シュタイナーの著書『神智学』の中では、人間が自分自身および周囲の世界に対して持つ「三重の根源的関係」が表明されています。

1）人間は「感官（五感）」を通じて、周囲の世界を感知します。

2）この知覚に、快・不快、反感と共感という「感情」が結びつきます。人間はこれによって、五感で感知できる対象をみずからの「内部世界」へと取り込み、それらの対象が自分にとって有益か有害かという観点から、自分自身との関係において考察します。

3）しかし、人間はこの関係性だけで満足することはありません。人間は、自分の好き嫌いとは完全に切り離されて、世界が「それ自体とし」どのようになっているのかを知りたいと願うのです。

これにより、人間の根本的な「三分節（体・魂・霊の構造）」が表明されたことになります。すなわち、人間は「体（ Leib ）」によって周囲の世界を感知し、「魂（ Seele ）」によってそれをみずからの内部世界とし、「霊（ Geist ）」によってその周囲の世界がそれ自体としてあるがままにどのようであるかを体験するのです。それゆえ、「体・魂・霊」こそが、人間の本質の根本的な構成要素なのです。

まず思考のなかに自らを現す「霊」は、自分自身を観察の対象とすることができ、自己を同定することができます。霊は自分自身のことを「自我」と言い表すため、四つの構成体の人間枠組みにおいては、人間の本質の核として「自我」と呼ばれます。

人間の各々固有の内部世界としての「魂」は、「感情」の中にその中心的な本質的特徴を持っており、すでに見てきたように、内部世界と外部世界との対立のなかに「意識」を生じさせます。私たちは、四つの構成体の枠組みにおいて、この魂を「アストラル体」と等置できます。

そして、私たちが今、周囲の世界の感覚的知覚の基礎として「体」と呼んでいるものは、四つの構成体の枠組みにおける「肉体とエーテル体の緊密な結合」に他なりません。この結合は死に至るまで維持され、死後に初めてばらばらに崩壊し、それが死体の解体へと繋がっていくのです。

私たちはこれによって、先ほどの「四つの構成体」から、今回の「機能的な三分節」への橋渡しを完了しました。ここから、この三分節のシステムについて、さらに詳しく考察していくことにしましょう。

今述べた人間の三つの根本的な構成要素、すなわち「体」「魂」「霊」のそれぞれは、いわば全体の三分節構造の「鏡像」のように、その内部にさらなる機能的な三分節構造を示しています。

まず、その本質を「感情」の中に中心的に生きている「魂」から見てみましょう。魂は、体と霊との間を仲介する「中間・媒介」のポジションに位置していますが、感情の他にも、さらに二つの機能の担い手となっています。それが「表象（ Vorstellen ）」と「意志（ Wollen ）」です。

・体の方からやってくる感覚知覚は、霊によって概念的に規定され、互いに結びつけられます。これによって「表象的な秩序」が生み出され、人間はそれをみずからの記憶の中に留めておくことができるようになります。これが「表象（思考の魂的側面）」です。

・しかし、魂は周囲の世界に対して単に受動的に振る舞うだけではありません。魂は「意志」を介して、五感で知覚された物質世界の中へと働きかけることができます。そればかりか、意志は思考のなかで「霊を活性化」させることもできるのです。

したがって、私たちはここに三つの魂の機能を見出しました。すなわち、「表象」「感情」「意志」です。これら三つの（魂の）機能は、先ほどやはり機能的な観点から提示した、三つの身体のシステム（肉体システム）によって支えられています。

・「表象」は「神経・感覚システム」に、
・「感情」は「リズムシステム」に、
・「意志」は「新陳代謝・運動システム」に、それぞれ依拠しているのです。

この機能的な三分節構造は、「霊」の中にも鏡のように映し出されています。思考する霊は、一方では、過去の知覚を「記憶」へと組み込み、必要に応じてそれを再び意識へと呼び戻す能力（記憶）を持っています。他方では、未来の行動を「計画」する能力を持っています。

そして、過去へと向けられた活動（記憶）と、未来へと向けられた活動（計画）という、これら二つの活動の狭間で、霊は「現在」の中に生きています。霊は、みずからの知覚の地平に現れるあらゆる新しい状況に対し、それに「ふさわしい概念」を形成することによって、その状況を克服していくのです。霊は、その時々の状況をこの概念によって、過去に記憶されていた事柄へと結びつけ、同時に、計画された未来の行動の中へと意味深く組み込んでいきます。

私たちはこのアプローチのことを、短く「機転（ Geistesgegenwart ／霊の現臨）」と呼びます。ここにこそ人間の「自由」の根源があります。なぜなら、思考を放棄した状態で特定の状況に対して行う反応は、本能や衝動に縛られたものであるか、あるいは私たちの欲求の性質から生じるものにしかなり得ないからです。本能、衝動、欲求は、身体的な領域、および魂の無意識的な部分から湧き上がってくるものなのです。このように、私たちは霊の中にも機能的な三分節構造を持っています。

私たちはここで、中間にあるもの（魂）によって結びつけられている「霊と体（物質）の極性（対立）」を、一つの「天秤（ Waage ）」のイメージとして視覚的に思い描くことができます。天秤がバランスを崩して傾いたとき、中間にあるもの（魂）の活動が、いわば一種の「動かせる分銅」のように作用して、それを幾度となく再び均衡へと連れ戻すのです。

私たちはここにも、健康と病気に関する本質的なイメージを見出すことができます。それは、三分節システムにおける「均衡状態」あるいは「不均衡状態」によって表現されるものです。

そして、私たちはこの「極性とそれを媒介する調和」を、身体（肉体）のレベルにおいて、「神経・感覚システム」と「新陳代謝・運動システム」の対立（あるいは引き離されようとする傾向）、そしてその両者の間を調和的に媒介する「リズムシステム」の相互作用のなかに再発見します。

そればかりか、魂のレベルにおいては、「表象」と「意志」の極性と、それを媒介して調和させる「感情」のなかに、そして最終的には霊のレベルにおいても、「過去の記憶」と「未来の行動計画」の極性と、それを絶えず調和させる「現在の機転」のなかに、この均衡のシステムを見出すことができるのです。

ただし、いま用いた天秤のイメージを、硬直した機械的な意味で捉えてはなりません。機械的な天秤の場合、重さを修正することによって、常に「かつてと全く同じ古い均衡状態」が再現されるだけです。しかし、人間の有機体における二つの対極（両極）においては、単なる機械的なものを超えた高次の環境のなかで諸プロセスが進行しています。それゆえ、私たちはここで「極性と昂揚」の原理を扱っているのです。

私たちが、特定の偏りによって引き起こされた「病気」を、常にプロセスとしての性質を持つ何らかの治療的措置によって相殺してバランスを取るとき、最終的に到達される「健康状態」は、病気になる前の健康状態に比べて、一段階引き上げられた「前進（進歩）」を意味しているのです。

なぜなら、ある医薬品物質を治療薬として投入する際、その物質自体は一度「完結して終わったプロセス」である、という事実を念頭に置いておかねばならないからです。この物質が人間の有機体内へと導入されて初めて、その物質が秘めていたプロセスとしての性質が再び表面化してきます。

そして、これこそが「薬学の技法」の核心です。様々なプロセスや調製法――例えば「ポテンシー化（Potenzieren ）」などを思い浮かべてみてください――を通じて、物質、すなわち「終わってしまったプロセス」を、すでに試験管内の段階で、再び「プロセスの状態」へと引き戻しておくのです。もしこれを行わなければ、患者の生体内において、未加工の物質を相手にその多大な負担を伴う物質の解体というプロセスを自力で実行せねばならなくなるところだったのです。まさにこの点において、ルドルフ・シュタイナーは、対症療法（アロパシー）とホメオパシーとの対立を、根本的な本質の違いとしてではなく、単なる「段階の違い」にすぎないと呼ぶ正当な権利を得たのです。

ルドルフ・シュタイナーが再発見し、概念的な形へとまとめ上げた上述の「三分節の原理」は、壮大な思想であり、この思想を同時代の人々の前に提示したことは、極めて重要な「偉業」でした。

なぜなら、これは9世紀（注：869年の第4回コンスタンティノープル公会議）以降、決定的な西欧文化から姿を消し、代わりに「二元論の原理（体と魂、あるいは精神と物質の二分説）」へと置き換えられていた「人間の三分説」という思想の奪還を意味しているからです。この二元論化こそが、自然、文化、そして社会における多くの事実への認識論的なアプローチを遮断し、あるいは少なくとも阻害してきた原因だったのです。

医師にとって、この三分節は医薬品の発見だけでなく、診断の確立や治療法にとっても極めて重要なコンセプトとなります。そして製薬者にとっては、これこそが医薬品を調製するための強力な道具となるのです。

なぜなら、厳密に検証してみるならば、これは古代の錬金術師たちやパラケルススの　伝統を汲む医師たちが掲げた「三原則（Tria-Principia ）」、すなわち「塩・水銀・硫黄」の概念を、現代にふさわしい形で「更新」したことに他ならないからです。かつての古代人たちが、診断、医薬品の発見と調製、そして治療において、この原理をどちらかといえば「直感的」に適用していたのに対し、現代の私たちは、それを明確な「認識」の事象として扱うことができるのです。

この錬金術的な名称である「塩」「水銀」「硫黄」の中には、アリストテレスの「形相」と「質料」の原理もまた、一つの「根源的な極性」として内包されています。

・いわば「壊された形相」であり、「形相を埋める材料」としての「質料（硫黄）」が一方の極（動的・カオス的な極）に立ち、

・それ自体としての形相（塩）」がもう一方の極（静的・結晶化の極）に立っています。

私たちが空間のなかに感覚で感知できる何らかの対象を目の前にするとき、私たちはその対象に、この「質料（硫黄）」と「形相（塩）」の極性を見出すことができます。

そして、感覚に現れる空間世界は決して硬直した固定的なものではなく、形相も質料もたえず変動（メタモルフォーゼと新陳代謝）しているため、この両極の間を媒介し、均衡を保つための「第三の原理（水銀）」がそこに存在していなければなりません。

それこそが、ヘラクレイトスの「パンタ・レイ（ Panta rhei ／万物は流転する）」の表現（メルクリウス的な流動性）であり、あるいは、その流れる方向性（ダイナミズム）まで考慮に入れるならば、スパギリック（錬金術的製薬術）の伝統が言う「ソルヴェ（ Solve ／溶解せよ：硫黄化・流体化のプロセス）」と「コアグラ（ coagula ／凝固せよ：塩化・結晶化のプロセス）」の表現に他ならないのです。

この「三原則」は、物質の「三つの状態」の中にも表現されています。

固体 ＝「塩」
液体 ＝「水銀」
気体・熱 ＝「硫黄」

あるいは、錬金術師たちが状態のバリエーションに対して用いた名称、すなわち古代の「四元素（エレメント）」のなかにこれらを再発見するならば、次のようになります。

地 ＝「塩」
水 ＝「水銀」
空気・火 ＝「硫黄」

人間の「四気質」においては、この三原則の現れ方はもう少し分かりにくくなりますが、次のように対応しています。

胆汁質（これまでの定訳：胆汁質および多血質）は、「硫黄的」であり、
粘液質は、「水銀的」であり、
憂鬱質（黒胆汁質）は、「塩的」です。

これらの気質に対応しているのが、古代および中世の医学において、あらゆる器官や器官系を発生させる源泉とされた人間の「体液（Humores ）」です。

それらの混合比率がバランス（調和）を保っている状態（Synkrasis ／調和期）にあれば、人間は健康です。しかし、それが乱れて崩れてしまっている状態（Dyskrasis ／不調和期）にあれば、人間は病気になります。ここにもまた、私たちは三原則を認めることができるのです。

血液および黄胆汁 ＝「硫黄」に対応
粘液（おもにリンパや粘液） ＝「水銀」に対応
黒胆汁 ＝「塩」に対応

私たちが、三分節化された人間を、その精神（霊）的、魂（心）的、そして身体（肉体）的レベルにおけるそれぞれの三分節構造のありのままの姿において全体として見渡すとき、そこに「三原則」に従った次のような対応を見出すことができます。

・硫黄的極（熱・代謝の極）は、まず（体・魂・霊の分節において）「霊（精神）」に現れ、次に霊的レベルにおいては「計画的な行動」に、魂のレベルにおいては「意志」に、そして身体のレベルにおいては「新陳代謝・運動システム」に現れます。

・塩的対極（結晶化・神経の極）は、まず「体（身体）」に現れ、次に霊的レベルにおいては「記憶・想起」に、魂のレベルにおいては「表象」に、 身体のレベルにおいては「神経・感覚システム」に現れます。

・両者を結びつけ、均衡を創り出し維持する原理、すなわち水銀）的原理（流動・リズムの極）は、最上層の分節においては「魂」に見出され、霊的レベルにおいては「機転（霊の現臨）」に、魂のレベルにおいては「感情」に、そして身体のレベルにおいては「リズムシステム」に見出されます。

次に、この三原則を、人間の下に位置する自然諸界（自然界の階層）のなかに追いかけてみましょう。

動物界において、硫黄的原理の代表としては、新陳代謝のなかに強く生きている動物を見出すことができます。「牛」がその代表です。塩）的原理を代表するのは、神経・感覚システムのなかに最も強い特徴を現している動物たちです。「鷲」がその好例です。そして、水銀的原理を強力に現している動物としては、「獅子」を例として挙げることができます。なぜなら、獅子はリズムシステム（呼吸と循環）のなかに極めて強く生きているからです（注：これら牛・鷲・獅子は、自我を持つ人間に統合される動物の三大典型です）。

さらに下の植物界へと降りていくなら、私たちは高等植物（茎葉植物）の三分節構造のなかにこの三原則を見出します。

根 ＝「塩」
茎と葉（地上部） ＝「水銀」
花、果実、種子 ＝「硫黄」

ここで、三分節化された「人間」と、三分節化された「植物」が、それぞれ地球の地面（土壌）に対してどのように位置しているかを並べて比較してみるならば、次のように言うことができます。「人間とは、逆立ちした（上下が反転した）植物である。」

最も広い意味での鉱物界、すなわち生命のない物質へと降りていくなら、私たちはこれらをやはり「三原則」に従って分類することができます。

・常温において固体（塩）の要素に属する物質があります。その代表として、石英や食塩、さらには蔗糖などを挙げることができます。

・常温において液体（水銀）である物質があります。これには水銀（金属元素）や水、さらにはアルコールが数えられます。

・第三に、常温において揮発性、気体であり、容易に蒸発、芳香を放つ、あるいは燃焼（硫黄）する物質があります。これには硫黄やリン、さらにはエッセンシャルオイル（精油）などが属します。

しかし、この分類だけで、三原則に基づいた鉱物や金属の考察が決して尽くされたわけではありません。金、石英、水、空気、ミツロウ、蛇毒、あるいはラベンダーオイルといった、あらゆる鉱物・自然物質は、た

とえ常温での状態に基づいて一つの原則（例えば固体＝塩）に分類できるとしても、その内部に三原則のすべてを丸ごと内包しているのです。

例えば「金」は、第一には塩的な物質として捉えられます。それにもかかわらず、金は他の二つの原則（水銀と硫黄）をもその内に宿しており、その塩的な金の中から硫黄的あるいは水銀的な原則を「引き出す」ことができるかどうかは、ひとえに適切な処理、すなわち「製薬プロセス」にかかっているのです。

私たちは、このことを「金」という物質を例にとり、ある特定の製薬プロセス――「ポテンシー化（ Potenzieren ）」――において具体的に示してみたいと思います。

試験管内で行われるプロセスとしての「ポテンシー化」は、生体内で行われるプロセスである「消化プロセス」を忠実にトレースしたものです。
それは、一定の希釈比率（例えば1：10）に基づき、各希釈段階において物質にリズムを伴う処理（振盪・攪拌、あるいは乳鉢での共擦りを加える、段階的な物質の希釈プロセスです。

これは、体内に取り込まれた物質（食物であれ医薬品であれ）が、唾液、胃液、腸液、そして血液によって処理され、そこに胃腸の「蠕動運動」や脈打つ「血液循環」が加わるプロセスと、完璧に対応（合致）しているのです。

このプロセスを「金」に適用すると、私たちは次のような現象を起こすことができます。

・D1 ～ D10（10倍希釈の第1～第10段階）のポテンシー段階において、金の持つ「塩的原則」が優位に立ち、

・それがD10 ～ D20のポテンシー段階へと進むと、徐々に「水銀的原則」へと移行（変容）していきます。

・そして、さらにポテンシー化を推し進めると（D20 ～ D30のポテンシー段階）、私たちは金の中に眠る「硫黄的原則」さえも表面化させることができるのです。

ここまでの考察から、ひとまずの結論を導き出してみましょう。私たちが、人間の有機体、その器官系、そして個々の器官における諸プロセスと、人間外部の自然界における諸プロセスとの間の「対応関係」を探求するならば、ルドルフ・シュタイナーは、私たちが病気と呼んでいる「精神（霊）的、魂（心）的、そして身体（肉体）的な不均衡」を解消するための本物の鍵を、この「三原則」のなかに確かに私たちの手へと委ねてくれたのだ、と言えます。

その際、自然諸界との共通の進化を視野に捉えるならば、自らの下に位置する三つの自然諸界と結びついた「四構成（四つの構成体）の人間」という視座が、大きな助けとなってくれます。そのためには、もう一つの第二の鍵が必要とされるだけです。すなわち、「人間の個体発生（ Ontogenese ）は、その系統発生（ Phylogenese ）を繰り返す」という鍵です。

進化論者（唯物論的な記述を伴う下向進化説の理論家たち）によって「逆立ち（頭と足が反転）」させられていた進化の歴史を、再び本来の足でしっかりと立たせる（人智学的な霊的進化論へと反転させる）とき、新しい治療法や医薬品を模索している医師、薬剤師、そして自然科学者たちの前に、途方もなく壮大な「未来のパノラマ」が立ち現れてくるのです。

この世界を去るのがあまりにも早すぎたルドルフ・シュタイナーが、数々の医学講座や講義、そしてイタ・ヴェーグマン（Dr. Ita Wegman）とともに著した唯一の医学書（『治療芸術の拡張のための基礎知識』）のなかに、いわば「未完成の彫像（トルソー）」として残していった膨大な示唆や指針は、現代の私たちによる「補完」と「さらなる拡張」を今まさに待ち望んでいるのです。

1922年に作成されたアルレスハイムの完全な調剤リスト（通称「番号リスト／ Nummern-Liste 」）には、当時の国際研究所（ Internationale Laboratorien A.G. ）によって製造されていた計295種類に及ぶ調剤（単一製剤および複合製剤）が掲載されています。

このリストには、各調剤の開発者、そのレシピ（すなわち成分組成）、さらには製薬技術に関する製法、そして適応症、作用機序、投与量、使用説明（用法・用量）が記されています。レシピの第1〜109番、第112a番、第121番、第122番はルドルフ・シュタイナーを開発者とし、第110番と第147番はイタ・ヴェーグマン博士に遡ります。また、第111〜120番はノル博士（Dr. Noll）とアイゼンベルク博士（Dr. Eisenberg）によるものであり、第123番以降については、先述の第147番を除いて開発者の名前は記録されていません。

このリストの根幹となっているのは、ルートヴィヒ・ノル（Ludwig Noll）が1920年の夏にルドルフ・シュタイナーと交わした対話から作成したメモです。ノル博士は、これらの重要な医薬品についてはルドルフ・シュタイナーの直接の口頭筆記に基づいているという点を強調していました。しかし、薬剤師のハンス・クリューガー（Hans Krüger）は、ほとんどのケースにおいて、これらは（直接の筆記ではなく）対話メモを後から記録したか、あるいは後年になって再編集したものである可能性が高く、したがって著作権（処方の主体的開発）としてはルドルフ・シュタイナーというよりも、むしろルートヴィヒ・ノルにあると見なすべきではないかと推測しています。

第1〜122番の処方は、1922年7月1日、シュトゥットガルト臨床病院の研究所への入社に際して、ルートヴィヒ・ノルから薬剤師のヴィルヘルム・シュピース（Wilhelm Spieß）へと手渡されました。ルートヴィヒ・ノルによるオリジナルの「番号リスト」は校正されていなかったため、いくつかの意味を歪めてしまうような誤りが含まれていましたが、のちに化学者のオスカー・シュミーデル（Oskar Schmiedel）と連絡を取り合いながら、ハンス・クリューガーが作成した写本のなかでそれらの誤りが指摘・修正されました。なお、番号リストの処方集の冒頭には、使用されている薬用物質と、各調剤の適応症が混ざったアルファベット順の索引が掲載されています。

番号リストに記載されている単一製剤（これらは医師が選択や組み合わせを行うことで、体質や運命に起因する多くの個別的な病状を治療することを可能にします）に加えて、ルドルフ・シュタイナーが「典型的な疾患」のための治療薬と位置づけた、少数の単一製剤と、何よりも多数の複合製剤（コンビネーション製剤）が存在します。

単一製剤については、『治療芸術拡張のための基礎』（※人智学医学の基本書籍）の中で言及されているリン、黄鉄鉱、石英、輝安鉱、硫黄、辰砂などの物質が該当しますが、7つの主要な金属もこれに含まれます。

複合製剤については、あるものは明確に、またあるものはより隠された形で「三分節構造の原理」に基づいて構成されているものです。これらは、その異なる作用点を通じて、人間存在の全体性の中央である「リズム系」を中心に、また極性を持つ周辺部分、すなわち「神経・感覚系」および「代謝・四肢系」においても、構成成分や原理の特有の比率によって作用するように意図されています。これにより、生体内全体に誘発されるプロセスを通じて、再び平衡状態、すなわち「治癒」が達成されるようになります。

それによって、全有機体のなかに誘導された治癒プロセスを介して、再び均衡状態、すなわち「治癒」が達成されるようになるのです。

この医薬品における「三分節の原理」の表現には、大きく分けて以下の3つのパターンがあります。

1)第1に、ビオドロン（ケファロドロン）やカルディオドロンといった製剤のように「3つの物質の組み合わせ」として表れる場合。

2)第2に、ディゲストドロンやヘパトドロンなどのように、特別なプロセスによって相互に結合された「2つの物質または物質グループの組み合わせ」として示される場合。

3)第3に、異なる時間に服用しなければならない「2相性の製剤」として現れる場合です。この場合、第3の原理は「交互に（交互作用に）」存在します。これは『ヴェレダ・アウフバウカルク（骨生長促進剤） 1種類目と2種類目』がその例であり、一方の相（No.1）は朝に、もう一方の相（No.2）は夕方に服用します。

これらの医薬品は、まさに「古典的」と呼ぶにふさわしいものです。なぜなら、これらはまず（先述の比喩を借りるなら）天秤のまさに支点にあたる、人間の有機体の中央（リズムシステム）に働きかけ、それと同時に、外側へと逸脱して漂流しようとしている「新陳代謝・四肢の極」あるいは「神経・感覚の極」の諸プロセスを再び中央へと引き戻し、均衡を再構築してくれるからです。

これらの薬剤は、古代ラテン語の名称である「レメディウム（ remedium ）」の正当性を証明してくれています。この言葉は、英語の「 remedy （レメディ）」やフランス語の「 remède 」の中にもそのまま保存されていますが、これは他でもなく、「人間を再び中央へ、すなわち健康へと導く薬剤」ということに他なりません。そしてこの意味は、ドイツ語の「 Heilmittel （治療薬）」や「 Arzneimittel （医薬品）」という名称の中にもしっかりと息づいているのです。

元来、これらの典型的な疾患のための医薬品は、例えば「Remedium contra hemicraniam（偏頭痛に対するレメディウム）」＝現在のビオドロン（ケファロドロン）や、「Remedium contra dysfunctionem hepaticam（肝機能障害に対するレメディウム）」＝現在のヘパトドロン、といった（中庸へと連れ戻すという）名称を冠していたのです。

ここで「典型的な疾患のための医薬品（典型医薬品）」という概念について、短く掘り下げておくのが適切な場所でしょう。

そのためにはまず、「典型的な疾患」とは何を意味しているのかを明らかにする必要があります。

典型的な疾患とは、その経過や症状の現れ方において、多かれ少なかれ固定され、明確に定義・特徴づけが可能な概念として捉えることのできる疾患のことです。したがって、それは他の典型的な疾患からもはっきりと区別されます。また、無限のバリエーションを伴って現れるために「症候群」と呼ばれるような、境界が不鮮明で流動的な複合症状とも明確に一線を画しています。

このような典型的な疾患が成立するのは、人間のあらゆる個体が「人間という種」に属しているというまさにその事実によって、内面に「相互に干渉し合う一連の病気への素因」を束として宿しているからです。そしてその素因は、人間の個々のカルマや、その時々の生活態度に応じて表面化してくることになります。

なぜなら、すべての人間は、人類に属しており、出生の瞬間から、のちに「意識」を発達させるように方向づけられた存在であるということ自体によって、根源的な病気への素因をその内に宿しているからです。人間は生涯を通じて、衰えゆく生命力と引き換えにこの素因と戦い続けますが、プロセスの進行を加速させる他の要因（外部環境や事故など）が加わらなかったとしても、最終的にはこの素因が人間を「死」へと至らしめることになります。なぜなら、先述した通り、意識の獲得（目覚めること）は、身体を構築していく生命プロセスを犠牲にすることでしか成り立たないからです。

この事実は、宗教的なイメージにおいては、「知恵の樹の果実を食べること」と、それによって「永遠の生命を失うこと」として描写されています。この（全人類共通の）病気への素因は、遺伝によって個体から個体へ、祖先から子孫へと受け継がれていきます。これは、宗教的な概念における「原罪（ Erbsünde ）」と完全に同義です。

それればかりか、ある特定の人種、国民、民族、氏族、あるいは家族に属しているということ、一言で言えば「個人を超越した上位のグループ」に属していることもまた、祖先から子孫へと遺伝する身体的要因を介して、個々の人間にとってそのような「典型的な疾患」の素因となり得るのです。

それが小児病（麻疹や猩紅熱など）であれ、偏頭痛、血友病、結核、梅毒、気管支肺炎、癌、あるいは肝炎などであれ、これらの疾患はすべて、それによって診断を確立できるような「典型的な病像」を示しています。たとえそれらが、状況によっては個人の特有の（個別的な）随伴症状によって多少の変形を被っているとしても、多くの場合、その背後にある「基本形」を明確に特定（識別）することができるのです。

これらの（人類共通・民族共通の）典型的な疾患に対して、ルドルフ・シュタイナーは自らの共同研究者や門下生たちとともに「典型医薬品」を開発しました。これらは、該当する疾患の治療における「基礎医薬品」と見なすことができます。

そして、実際の臨床においては、患者の体質やカルマ的な背景に応じた「個別の変形」に従い、人智医学が誇る膨大な医薬品のラインナップの中から選ばれた*「単一製剤」を用いた個別的な治療によって、この基礎医薬品を補完し、さらに拡張させていかなければならないのです。

典型医薬品の一つについて、先ほどの「三原則」に従って短く描写してみることにしましょう。それが「ビオドロン（ Biodoron ／ドイツ名：ケファロドロン／ Kephalodoron ）」です。

この医薬品は、「珪石」――「鉄」――「硫黄」という3つの成分によって、人間の三つの機能系、すなわち、魂の機能である「思考」の身体的基礎である「神経・感覚システム」、魂の「感情」の身体的基礎である「リズムシステム」、そして魂の「意志」の身体的基礎である「新陳代謝・運動システム」のすべてに直接アプローチします。だからこそ、この調剤は「偏頭痛」のような全身の調和が崩れた病像を根本から治療するのに適しているのです。

偏頭痛が起きているとき、人間の「神経・感覚プロセス（頭部のプロセス）」は「新陳代謝」に対してある種の劣勢を示しています。その結果、新陳代謝プロセスが、本来働くべきではない領域、すなわち「頭部の極（頭頂極）」にまで過剰に拡大してしまっているのです。

ここに、神経・感覚の極に対して強い親和性を持つ「クォーツ」を投入すると、この頭部領域に属する本来のプロセスが再び強化されます。そして、頭部へと侵入していた新陳代謝プロセスは押し戻され、本来あるべき場所、すなわち下半身の「新陳代謝の極」へと送り返されるのです。

このクォーツの働きをサポートするのが、硫酸鉄（含硫鉄）の内部で硫黄と緊密に結合している「鉄」です。この硫酸鉄は、原理的にはクォーツと同じような「塩的物質」として作用するため、クォーツが神経・感覚の極のプロセスを強化する働きを側面から強力に支援します。

それと同時に、この塩（硫酸鉄）の中に含まれる「硫黄」は、上部に溢れていた新陳代謝プロセスを、人間の組織におけるそれ自身の本来の極（下半身の代謝極）へと下方に向けて引き導きます。

そして、中間（胸部）の人間、すなわちリズムシステムの金属であり、赤血球の色彩（ヘモグロビン）として全身を循環している「鉄」が、これら（頭部と腹部の）両極の間の均衡を鮮やかに再構築するのです。

これが、ビオドロンを用いた偏頭痛治療の「合理的根拠（ Ratio ）」の短いスケッチです。その有効性は、第一にはまさにこの「三原則」に完全に依拠しています。

この均衡を再構築し、調和をもたらす作用は、最終的な製品（完成した錠剤など）の中では背景へと退くか、あるいは消失してしまうものの、その製造プロセスにおいて決定的な役割を果たす物質によってさらに

支えられています。それが「蜂蜜」と「ワイン」です。これらは製造の中間段階において、鉱物物質同士を仲介して「結合させるもの」として現れ、役割を終えると再び姿を消します。

この製造プロセスがあるからこそ、私たちは次の点に正当性をもって言及することができます。すなわち、この調剤の中では「塩・水銀・硫黄の原理」だけでなく、人間の下に位置する三つの自然諸界の代表――「鉱物（クォーツなど）」、「植物（ワイン）」、「動物（蜂蜜）」――もまた重要な役割を演じている、ということです。

これら三つの自然諸界の原理（物質による空間の充填、生命、意識）が相互に作用し合うことによって、人間が「自由な存在」となることが可能になるのです。

このように組成のうえで完璧なバランスを保って調製された薬は、単なる偏頭痛の治療という枠をはるかに超えて、人間の内なる多種多様な不調和を解消することのできる万能な調剤となり得ます。そればかりか、人間の有機体全体に対して強力な「生命活性」をもたらす作用を持たざるを得ないのです。だからこそ、ルドルフ・シュタイナーはこの医薬品のことを、直截に「ヴィタライザー（生命活性剤／ Vitalisator ）」と呼びたいとさえ願ったのです。

典型医薬品については、ルドルフ・シュタイナーによって「製薬技術に関する指示」も与えられていたという点に注目せねばなりません。個々の医薬品の製造プロセスは、部分的に極めて手間がかかり複雑なものであり、時には中世の錬金術師たちの手順を彷彿とさせるものさえあります。これらについてここで一際詳しく立ち入ることは、本稿の枠組みを大きく超えてしまうことになるでしょう。

その製造手法に関して述べるならば、すでに触れた「ポテンシー化」以外にも、ルドルフ・シュタイナーの示唆に遡る一連の特有の手法が存在し、それらは彼から直接、あるいはルートヴィヒ・ノルを介して国際研究所へと伝わりました。これらの手法には、以下のようなものがあります。

1. Rh製法（リズム製法）

植物の圧搾汁や水性の植物抽出液に対し、「温度変化（寒暖）」、「運動（攪拌・揺動）」、「光への暴露（明暗）」をあらかじめ定められた時間間隔（インターバル）で行う、特殊なリズム処理を施す調製法です。これにより、アルコールを一切添加することなく、長期保存を可能にさせることができます。これらは水性の希釈液へと加工されます。

2. 薬用植物による金属および金属含有鉱物の植物化：

薬用植物を介して金属をオーガニック化する（植物と同化させる）独自の手法です。

・第1世代の薬用植物に、特定の金属または金属含有鉱物を肥料として与えて栽培し、その収穫後に堆肥にします。

・その堆肥を用いて、同じ種類の植物の第2世代を栽培し、その後やはり同様に堆肥にします。

・その堆肥を用いて、第3世代の植物で同じ手順を繰り返します。こうして育った第3世代の植物から、最終的な医薬品が製造されるのです。すなわち、第1世代の肥料であった金属や金属含有鉱物が、3つの植物世代を通過することによって「（生きた植物の力で）ポテンシー化された」と言うことができます。かつて、このような調剤は例えば「Aurum per Primulam（サクラソウを通過させた金）」と呼ばれていましたが、今日では「Primula, Auro culta（金で栽培されたサクラソウ）」と表記されています。

3. 薬用植物のモデルに基づく鉱物性医薬品組成：

この手順の目的は、対応する薬用植物そのものから作られた医薬品よりも、さらに強力で持続的な効果を示す医薬品を製造することにあります。ここでは、植物内における鉱物物質の「機能的な結びつき」をその時間的な経過（植物の成長プロセス）において探求し、それを鉱物界から集めた物質の組み合わせによって人為的に再現・構築していくというアプローチが取られます。

ヴェレダの医薬品ラインナップは、創業期以来、絶えず修正が加えられ、医師や患者のその時々の現代的なニーズへと適応させられてきました。そのため、医師たちの臨床経験に基づいて、新しい単一製剤や複合製剤が次々と取り入れられてきました。その中には、ホメオパシー（同質療法）やフィトセラピー（植物療法）の経験に立脚し、そこからヴェレダの医薬品の宝庫へと参入してきたものもあります。

その一方で、多岐にわたる技術的な困難、医薬品法（薬事法）の規制、当局（行政）からの直接的な命令、そして何よりも需要の減少といった理由から、特定の医薬品の製造を断念せねばならなかった（ラインナップから外さざるを得なかった）ことも避けられませんでした。

医薬品の宝庫を、絶えず変化する患者や医師のニーズに適応させ、人智学的な観点に基づいて拡張・補完していくこと、これこそが、ヴェレダにとって未来永劫続く「恒久的な課題」であり続けるのです。

「ルドルフ・シュタイナーとヴェレダの創設」

編集・構成：アレクサンダー・リュッシャー
共同調査：アドリアン・ゴンツェンバッハ、ウラ・トラップ

●ヴェレダはどのようにして創設されたのか？
●ヴェレダはどのような企業から誕生したのか？
●ヴェレダはどのような方法で諸事業を買い取ったのか？

●ヴェレダはどのようにして創設されたのか？

通常、株式会社の設立といえば、法律に則って明確に計算された形式的な手続きであり、それゆえにどちらかと言えば退屈で、劇的な要素などない事象であると想像されがちです。しかし、こと「ヴェレダ株式会社（Weleda A.G.）」の創設に関する限り、この一般的なイメージは全く当てはまりません――それどころか、現実はその真逆だったのです！

〔フトゥールム研究所を独立させるという決議〕

事の始まりは、1922年2月20日に開催された「フトゥールム（Futurum）」取締役会において、フトゥールム・コンツェン（企業集団）に属していた「臨床病院」部門と「研究所」部門を、法的に独立させることが決議された瞬間でした。ルドルフ・シュタイナーは取締役会長としてこの会議に出席しており、独立に向けた必要な措置を執るための全権を委任されたのです。

この決議は、明らかにそれ以前から長きにわたって繰り広げられていた議論の「帰結」を示すものでした。

一方の背景として、様々な部門の責任者たちが、より大きな独立性を求めて奔走していました。特にイタ・ヴェーグマン（Dr. Ita Wegman）はその方向に向けて強く働きかけていたに違いありません。というのも、彼女はフトゥールムの経営陣との間に大きな問題を抱えていたからです。

もう一方の背景として、企業全体に対してではなく、特定の事業とその固有の目的（医療・製薬）に対してであれば、さらなる出資者からの資金を引き出すことができるのではないか、という期待がありました。

こうして、新しい組織コンセプトに従い、フトゥールム株式会社（Futurum A.G.）は将来的に、「自由なアソシエーション（協同）」によって互いに結合された、それぞれ独立した企業群によって構成されるべきであるとされたのです。

遅くとも1922年1月には、フトゥールム社の内部において、独立した「臨床・製薬企業」がどのような姿であるべきかについての議論がすでに行われていた形跡があります。提示された様々な提案の中で際立っていたのは、臨床病院と研究所の双方に対して、それぞれ「別々の解決策」が模索されていたという点です。おそらく、臨床病院についてはイタ・ヴェーグマンが個人企業として継続し、研究所については、フトゥールム社が無限責任社員（出資元）となり、様々な資金提供者を有限責任社員（コムマンディテール）とする「合資会社（コマンディット・ゲゼルシャフト）」の設立を想定していたと考えられます。

〔独立した株式会社の創設〕

ルドルフ・シュタイナーが設立の責任を引き受けたことで、これまでのあらゆる奔走に全く異なる新たな方向性が与えられました。

1922年2月から3月にかけての時期に作成された、シュタイナーによる自筆の原稿が複数遺されています。その中で彼は――おそらくイタ・ヴェーグマンとの共同作業において――「臨床・製薬企業」の設立趣意書の草案作りに取り組んでいます。これらの草案において決定的に重要だったのは、臨床病院と研究所を統合し、一つの統一された会社、すなわち「株式会社（ Aktiengesellschaft ）」とするという点でした。

こうした創設への奔走と並行して、フトゥールム株式会社（ Futurum A.G. ）はますます深刻な危機（経営不振）へと滑り落ちていきました。同社は急速に資金繰りが悪化（債務超過寸前に）し、その経営陣に対する批判は日増しに高まっていったのです。したがって、フトゥールムの組織体系から「臨床病院」と「研究所」を完全に切り離して救い出すことは、これら2つの事業の死活問題となりました。

3月の間に幾度となく開催され、部分的にはイタ・ヴェーグマンやアルベルト・シュテッフェン、のちにはルドルフ・シュタイナーも出席した一連の「危機管理会議（臨時取締役会）」において、この分離独立の必要性は極めて明白になりました。そして、これら3人の人物（シュタイナー、ヴェーグマン、シュテッフェン）が発起人委員会を構成し、1922年4月の初頭（正確な日付は不明）に一つの声明を発表したのです。その中で彼らは、臨床・化学企業である「国際研究所および臨床治療研究所アルレスハイム株式会社（ Internationale Laboratorien und Klinisch-Therapeutisches Institut Arlesheim A.G. ）」の創設を、その明確なゴールとして周知されました。

当時のスイスの株式法（会社法）によれば、株式会社の設立は以下の二つの方法のいずれかによって執り行うことができました。

・一段階による設立（いわゆる「同時設立／ Simultangründung 」）：
発起人（創設者）たちが、最初から株式資本の全額を引き受ける（全株を買い取る）方法。

・二段階による設立（いわゆる「発起設立／漸次設立／ Sukzessionsgründung 」）：
発起人たちが株式資本の一部のみを引き受け、残りの株式を一般の自由な公募にかける方法。

〔当初の計画：株式の一般公募〕

発起人（創設）委員会は、当初はおそらく「発起設立」を想定していたと考えられます。というのも、この設立手続きを通じて外部からの追加資金の流入を強く期待していたからです。

ルドルフ・シュタイナーがドルナハを留守にしている間の1922年4月10日、急遽、最初の即興の集会（準備会）が開催されたに違いありません。そこでは、新会社の定款や、株式資本の一部を一般公募にかけるための設立趣意書についての話し合いが行われました。しかし、この集会はあまりにも準備不足であったため、スイスの法律上、正式な「第一回創設総会（創設発起人会）」として承認を受けることができませんでした。そのため、この手続きは明らかにやり直さなければならなくなりました。

それが実行されたのが1922年5月10日であり、この時もやはりルドルフ・シュタイナーは不在でした。この集会においてようやく定款が整理・修正され、暫定的な取締役会が選出され、設立趣意書の最終版が承認されました。これによって、いよいよ正式に株式引受けの公募が開始されたのです。こうして、新しい株式会社の法的な有効性を備えた設立に向けて、どうにか第一歩が踏み出されました。

続く数週間のうちに、主に海外――とりわけイギリス――から、一連の株式引受け（出資の申し込み）が相次いで舞い込みました。しかし、これには一つの法的ハードルが伴っていました。

スイスの株式法の手続き上、これらの海外の一般公募に応じた株主たちは、第二段階の最終的な「設立確定総会」にみずから「直接足を運んで出席する」か、さもなくば法的な「委任状」を用意しなければならなかったのです。これは、関係するすべての人々にとって、途方もない労力と負担を意味していました。

そのため、発起人たちは手続きを「簡素化」するため、一段階による設立、すなわち「同時設立（Simultangründung）」へと方針を転換することを決断したのです。これはつまり、株式の一般公募を差し当たり一時停止して後日へと延期し、まずは発起人たちだけで一挙に設立を完了させてしまおう、という決定でした。

〔紆余曲折の末に：クローズドな設立完了〕

1922年11月21日、新株式会社の従業員であったオスカー・シュミーデル博士（Dr. Oskar Schmiedel）、ハインリヒ・デンツラー（Heinrich Denzler）、アーサー・イムリー（Arthur Imrie）の3名が、ドルナハの公証人エルンスト・フォン・アルクス（Ernst von Arx）の事務所に集まり、ついに会社設立の登記手続きを執り行いました。

彼らは、一部は自分自身の名前で、しかしその大部分は委任を受ける形で、株式資本の全額を代表していました。彼ら、および彼らに委任状を託したごく少数の他の創設株主たちは、一つの「企業連合」として、すなわち一種の「名義人株主（実質的な出資者の身代わりとなる株主）」として行動したのです。彼らは設立が法的に完了した後に、自分たちの名前で引き受けていた株式を、海外（イギリスなど）にいる「実際の出資希望株主たち」へと順次譲渡していきました——この譲渡の手続きは、実に1923年の6月まで長引くこととなりました。

この（11月21日の）設立総会において、1922年5月10日に作成されていた定款が最終的に承認され、取締役会のメンバーが正式に確定しました。かつて作られたあの「設立趣意書」は、もはや何の役割も果たしませんでした。なぜなら、この設立は——形式上は！——もはや一般に公開された株式公募には、一切立脚していなかったからです。

〔ヴェレダの本当の誕生日〕

したがって、法律的な観点から見るならば、この1922年11月21日こそが、ヴェレダ株式会社（Weleda Aktiengesellschaft）の真の公式な誕生日ということになります。1922年5月10日の集会は一種のプロローグにすぎませんでした。とはいえ、その時の決議内容は1922年11月21日の創設総会において追認の形で承認されることとなりました。

しかし、より実態に基づいた観点から出発するならば、1922年4月10日こそをヴェレダの誕生日と呼ぶべきでしょう。なぜなら、この日に最初の準備集会が開催されただけでなく、まさにこの時点から、設立途上の株式会社としての実際の「事業活動」がスタートしたからです。

なお、一般にしばしば公式の創立記念日として言及される1922年4月1日という日付は、あくまでも「簿記上の価値」しか持っていません。フトゥールム社（Futurum A.G.）との間で交わされた事業買収契約書の中で、この日付が「遡及的な事業引き継ぎ日」として規定されているにすぎず、実際にはこの4月1日の時点では、ヴェレダという会社はまだ影も形も存在していなかったのです。

●ヴェレダはどのような企業から誕生したのか？

もし、ヴェレダが何もない「ゼロ」の状態からその事業活動を築き上げたと考えるなら、それは正しくありません。

ヴェレダは確かに1922年に「完全に新しい会社」として設立されましたが、その存在のまさに始まりの段階において、すでに存続していた複数の異なる事業（会社・研究所）を買い取り、自社の中へと組み込んでいったのです。これらの事業のすべてが、いわばヴェレダ株式会社の「強固なルーツ」を形づくっているのです。

〔ヴェレダの二大巨根（2つの大きなルーツ）〕

ヴェレダがそこから発展を遂げることになった、2つの企業集団が存在します。

スイスの「フトゥールム株式会社（ Futurum A.G. ）」

ドイツの「デル・コメンデ・タ－ク株式会社（ Der Kommende Tag A.G. ／来るべき日）」

「フトゥールム」と「デル・コメンデ・タ－ク」は、いずれも1920年に創設された企業連合でした。これらは、いわゆる「アソシエーション（協同組織）」として、段階的な経済改革を通じて「社会有機体三分節化」の思想の普及に新たな弾みをつけるだけでなく、人智学運動の内部における様々な精神的（霊的）な取り組みを継続するための「資金の確保」をも目指していました。その取り組みの具体例としては、ドルナハにおける「精神科学自由大学」のさらなる拡張と運営、あるいはシュトゥットガルトにおける「自由ヴァルドルフ学校」の維持などが挙げられます。

そして、これら2つの企業の双方が、多かれ少なかれ拡張された「臨床病院」部門、および「化学・製薬」部門を備えていたのです。

・フトゥールム社（スイス）：

「化学・製薬研究所」部門（これは、さらに『化学・製薬実験研究所』と『化学・製薬製造研究所』の2つの小部門から成る）と、「臨床治療研究所」部門（すなわち、臨床病院・クリニック）を所有していました。

・デル・コメンデ・タ－ク社（ドイツ）：

やはり「臨床治療研究所」部門を所有していましたが、こちらは単なる臨床病院にとどまらず、さらに「研究所」と「製造」という2つの小部門が付け加えられていました。
少しややこしいのですが、当時の実態は次のようになっていました。この製造部門は、実態としては臨床治療研究所に属していましたが、法律上は、デル・コメンデ・タークの別の部門である「化学工場（ Chemische Werke ）」に本来属していたのです。
さらに、デル・コメンデ・タークの化学・製薬事業のもう一つの構成要素として、製造された医薬品の販売・流通を担う「発送」部門が存在していました。

ヴェレダは、これらすべての部門の中から、最終的には「化学・製薬部門」のみを永久的に引き継ぐこととなりました。

フトゥールムからは、「化学・製薬研究所」を継承。

デル・コメンデ・タークからは、「臨床治療研究所」の2つの小部門である「研究所」と「製造」、ならびに「化学工場」と「発送」部門を丸ごと継承。

一方で「臨床病院」に関しては、ヴェレダはアルレスハイムの臨床病院（イタ・ヴェーグマンの病院）を一時的に引き受けたにすぎず、シュトゥットガルトの臨床病院にいたっては、最初から全く引き継ぎませんでした。

〔ヴェレダの真の始源（本当の始まり）〕

ヴェレダが「フトゥールム」と「デル・コメンデ・タ－ク」の化学・製薬部門から発展したと言うのは、確かに正しいことです。しかし、これらの部門にしても、やはり何もない「ゼロ」から立ち上げられたわけではなく、事業としてそれ以前からすでに存在していました。

例えば、デル・コメンデ・タークの「化学工場」は、それ以前の「パウル・ルンプス植民地工場（ Colonial-Werken Paul Rumpus ）」から発展したものでした。あるいは、フトゥールムの「化学・製薬実験研究所」は、それ以前の「ゲーテアヌムの研究所（ Laboratorium am Goetheanum ）」から生み出されたものだったのです。

この「ゲーテアヌムの研究所」は、化学者であるオスカー・シュミーデル博士（Dr. Oskar Schmiedel）の指揮下にあり、1921年2月1日にフトゥールム社に買収されるまでは、「ゲーテアヌム協会（当時の名称はヨハネス建築協会）」に所属していました。

しかし、この時点ですでに、この研究所にはさらに長い前史がありました。「ゲーテアヌムの研究所」は、1914年3月1日からドルナハに存在していたのです。この基準日（1914年3月1日）に、シュミーデル博士はみずからの私設研究所――彼が1913年5月にミュンヘンで「オスカー・シュミーデル博士化学研究所」として創設したもの――を、財政的な困難、およびルドルフ・シュタイナーからの直々の要請をきっかけとして「ゲーテアヌム協会」へと譲渡し、その全備品とともにドルナハへと移住してきたのです。

しかし、ミュンヘンにおけるこのシュミーデルの私設研究所にさえ、さらにその前身が存在していました。

彼は、画家のイメ・フォン・エックハルトシュタイン（Imme von Eckhardtstein）とともに「化学・神智学研究所（ Chemisch-Theosophisches Laboratorium ）」を運営しようとした試み――この共同作業は1912年7月から1913年3月まで続きました――が失敗に終わった後に初めて、この私設研究所を立ち上げていたのです。

厳密に言うならば、この「ゲーテアヌムの研究所」と、そのミュンヘンにおける2つのドイツ時代の前身こそが、ヴェレダの「真の始源（本当の出発点）」と見なされるべきものです。そして、この最も古い「源流の根」こそが、のちにフトゥールムの「アソシエーション（企業連合）」の中へと組み込まれていったのです。

〔スイスの源流（スイスにおけるルーツ）〕

スイスの「フトゥールム株式会社（ Futurum A.G. ）」が1920年に創設された当初、同社にはまだ製薬部門が存在していませんでした。この部門が誕生したのは、1921年2月1日に「ゲーテアヌムの研究所」がフトゥールムの組織体系へと組み込まれてからのことです。この新しい部門である「フトゥールム社 化学・製薬研究所」の指揮は、それまでと変わらずシュミーデル博士の手に委ねられていました。

1921年6月13日、薬剤師のエルンスト・ハイム（Ernst Heim）がフトゥールム社に入社したことで、ここに2つの研究所が並び立つことになりました。

・化学・製薬実験研究所

・化学・製薬製造研究所

実験研究所はオスカー・シュミーデル博士が、製造研究所はエルンスト・ハイムがそれぞれの指揮を執りました。しかし、1921年8月21日、フトゥールムの取締役会はこれら2つの部門を1つに統合することを決議し、この「フトゥールム社 化学・製薬研究所」部門のすべての総合責任をエルンスト・ハイムへと委ねることにしたのです。

実験研究所の拠点は、当初はまだドルナハに置かれていましたが、その一方でエルンスト・ハイムは、バーゼルにあるフトゥールムの本社において製造研究所の立ち上げを進めていました。最終的にこれら2つの研究所は、1921年8月9日（効力は1921年7月9日へ遡及）にイタ・ヴェーグマンがアルレスハイムに賃貸した物件のなかに集約され、1つの屋根の下へと統合されました。ただし、技術的な様々な理由から、実際の本格的な医薬品製造が開始できたのは、ようやく1922年の1月初頭になってからのことでした。

エルンスト・ハイムがフトゥールムに入社した2日後の1921年6月15日、イタ・ヴェーグマンはアルレスハイムに自身の臨床病院である「臨床治療研究所（ Klinisch-Therapeutisches Institut ）」を開設しました。彼女は前年の1920年9月27日に、このサナトリウムのための物件（土地と建物）をすでに購入していたのです。

化学・製薬研究所が、独立性のない一部門としてフトゥールム社の経営陣の直属に置かれていたのに対し、この臨床病院は、法律（権利）上の位置づけとしては、イタ・ヴェーグマン博士によって営まれる独立した「個人企業（ Einzelfirma ）」でした。しかし、この個人企業は最終的に1921年8月11日にフトゥールム社とアソシエーション（提携）を結んだのです。したがって、臨床治療研究所は実態としてはフトゥールム社の一部門を形づくっていましたが、法的にはそうではありませんでした。

フトゥールム社におけるこれら2つの部門、すなわち、

アルレスハイムの「化学・製薬研究所」

アルレスハイムの「臨床治療研究所（病院）」

これらこそが、1922年4月1日に遡って、新しく設立された「国際研究所および臨床治療研究所株式会社（ Internationale Laboratorien und Klinisch-Therapeutisches Institut A.G. ）」によって、フトゥールム社およびイタ・ヴェーグマンの所有から買い取られ、引き継がれた事業だったのです。新会社のあの長い「二重の社名」は、まさにこの（研究所と病院の双方を引き継いだという）理由に起因していました。

しかし、臨床病院の方はそれから間もない1924年7月1日に、早くも再び株式会社から切り離されて独立し、「ゲーテアヌム協会」へと所属が変更されました。この病院の分離独立に伴い、この新株式会社の名称も短縮され、それ以降は単に「国際研究所株式会社（ Internationale Laboratorien A.G. ）」と呼ばれることになりました。これは、同年の10月1日付の効力をもって、彼らがドイツのデル・コメンデ・タークの化学・製薬部門を追加で買収したにもかかわらず、社名は短縮されたまま維持されたのです。

これらの事業（製薬部門）がその後も永久的にヴェレダと結びつき続けたのに対し、残された「フトゥールムの残存部門（その他の非製薬事業）」のいくつかの事業については、全く事情が異なっていました。これら残存部門は、1924年3月25日に国際研究所によって買収されました（当初1923年4月5日に下された最初の買収決議は、買収価格があまりにも高すぎたため、予定通りの枠組みでは実現していませんでした）。

しかし、この買収の目的はあくまでも「一時的」なものにすぎませんでした。これらの残されたフトゥールムの事業は、そこから調達できる資金を、自分たちの本来の事業（製薬）の資金繰りへと充当するために、再び順次売却・処分されるべきものだったのです。1927年1月1日をもって、最後の事業であったゲルター

キンデン（ Gelterkinden ）の「段ボール製造工場」の清算の効力が生じ、これによって、これらの純経済的に方向づけられていた前身企業は、国際研究所の枠組みの中から実際に何一つとして残らず姿を消したのです。

〔ドイツにおけるルーツ〕

ドイツの「デル・コメンデ・タ－ク株式会社（ Der Kommende Tag A.G. ／来るべき日）」の枠組みにおいては、全くの最初から「化学・製薬部門」の設立が計画されていました。同社の公式な創設日（1920年3月13日）のまさに前日である1920年3月12日に、シュヴェービッシュ・グミュント（ Schwäbisch Gmünd ）にある「パウル・ルンプス植民地工場（ Colonial-Werken Paul Rumpus ）」が（先んじて）買収されたのも、まさにこれが理由でした。

デル・コメンデ・タ－ク社は、この工場を独立性のない一部門として引き継ぎ――おそらく1920年4月20日付の効力をもって――「グミュント分社 化学工場（ Zweigniederlassung in Gmünd Chemische Werke ）」という名称で運営を継続しました。この部門の指揮を委ねられたのは、化学者のヴァルター・ケーラー博士（Dr. Walter Kehler）でした。彼は人智学運動の「外部」にいる専門家として招聘された人物でした。

シュヴェービッシュ・グミュントにおけるこの「化学工場」は、その後幾度となく組織改編を施されたため、時代の経過とともに小部門の数や名称は目まぐるしく変化していきました。

最初は、以下の2つの小部門が存在していました。

・「栄養食品工場（ Nährmittelfabrik ）」小部門（製粉所・ミリタリー事業を伴う）

・「化学工場（ Chemische Fabrik ）」小部門（医薬品の研究・製造のための研究所を伴う）

幾度もの試行錯誤を経たのち、1921年7月、シュヴェービッシュ・グミュントの体制はついに「医薬品の大規模な大量製造」を開始できる段階にまで到達しました。これには確実に、シュトゥットガルトの医師たち、とりわけ1921年4月からグミュントの研究所に共同研究者として参画していたルートヴィヒ・ノル博士（Dr. Ludwig Noll）とフェリックス・ペーパーズ博士（Dr. Felix Peipers）の多大なる貢献がありました。

しかし、この人智学の医師たちによる共同作業の開始をきっかけとして、外部から来たケーラー博士とシュトゥットガルトの医師たちの間で、明らかに「激しい対立」が生じることとなりました。最終的に、1921年9月21日に開催されたデル・コメンデ・タークの監査役会において、グミュントの研究所を部分的に独立させることが決議されました。すなわち、研究所を独自の独立した小部門へと格上げし、その指揮は引き続きケーラー博士が執るものの、シュトゥットガルトの医師団が「アドバイザーとしての最高監督権（ Oberaufsicht ）」を握るという体制へと変更されたのです。

こうして、1921年9月以降、シュヴェービッシュ・グミュントには以下の3つの小部門が並び立つことになりました。

「製粉所（ Mühle ）」小部門

「化学工場（ Chemische Fabrik ）」小部門

「臨床治療研究所（ Klinisch-Therapeutisches Institut ）」小部門

この第3の小部門（臨床治療研究所）は、ある種の半ば交配されたような「二重の立場」に置かれていました。法律上はグミュント分社に属していましたが、同時に、実際の事業運営の観点から見るならば、それはシュトゥットガルトにある「デル・コメンデ・タ－ク 臨床治療研究所」の一部でもあったからです。

このシュトゥットガルトの臨床治療研究所は――先述の「化学工場」とは異なり――最初から存在していたわけではなく、1921年2月15日頃にオットー・パルマー博士（Dr. Otto Palmer）がこの新しい部門の総合最高責任者として招聘されたことをきっかけに、新たに立ち上げられた新設の部門でした。この新しい研究所は、以下の2つの小部門で構成されていました。

・臨床病院（クリニック）

・研究ラボ（研究研究所／ Forschungslaboratorium ）

シュトゥットガルトに専用の「研究ラボ」を開設するというこの決定は、医薬品の「開発（研究）」と「製造」の領域をより明確に分離・独立させる、という戦略的プランに基づいたものでした。すなわち、シュヴェービッシュ・グミュントの研究所は、余計な開発を行わない「純粋な製造専用ラボ」へと純化させ、その一方で、シュトゥットガルトの臨床病院と緊密に連携した「本物の研究・開発専用ラボ（研究研究所）」を新たに開設しようとしたのです。

1921年2月1日にシュトゥットガルトに臨床病院を開設するための適切な物件が買い取られた後、1921年8月15日にその臨床病院が早くもオープンを迎えました。責任者であるオットー・パルマー博士の脇を固める医師団には、先述のルートヴィヒ・ノル博士、フェリックス・ペーパーズ博士、そしてフリードリヒ・フーゼマン博士（Dr. Friedrich Husemann）が名を連ねていました。

研究ラボについては、この同じ敷地内に「新館」を建設することが計画されていました。しかし、この建設計画の実行にはどうしても一定の時間を要すること、そして何よりも医師たちがグミュントのケーラー博士から完全に独立した状態で一刻も早くみずからの製薬研究を進めたいと熱望したため、1921年9月――おそらくシュヴェービッシュ・グミュントにおけるあの組織改編と全く同時に――シュトゥットガルトの「ヴァルドルフ学校」の敷地内にあった「科学研究研究所」の部屋を仮に借りる形で、暫定的な研究活動がスタートしたのです。この暫定ラボの指揮を執ったのが、ルートヴィヒ・ノル博士でした。

そして、1922年7月1日付で薬剤師のヴィルヘルム・シュピース（Wilhelm Spieß）がこの研究ラボの正式な最高責任者に任命されたのと時を同じくして、この暫定的な体制はついに終わりを告げました。臨床病院の隣に無事に完成した「新・研究ラボビル」の中へと事業が引っ越し、本格的な稼働が正式にスタートしたのです。

〔注文の急増とドイツ部門の完全買収（統合の完了）〕

医薬品およびその他の化学・製薬製品の注文は、1922年から1923年の間に明らかに途方もない規模にまで膨れ上がっていきました。そのため、デル・コメンデ・タ－ク社の枠組みにおいて、シュヴェービッシュ・グミュントの製造体制を支えるための、独立した独自の「販売・流通部門」をシュトゥットガルトに開設することが完全に必要不可欠になったのです。こうして、1923年11月に「デル・コメンデ・タ－ク株式会社 発送部門（ Der Kommende Tag A.G. Versandabteilung ）」がオープンを迎え、その指揮はテオドール・ラウアー（Theodor Lauer）へと委ねられました。

デル・コメンデ・タ－ク社におけるこれら3つの部門、すなわち、

・シュヴェービッシュ・グミュントの「化学工場（独立した小部門である『デル・コメンデ・タ－ク 臨床治療研究所 製造』を含む）」

・シュトゥットガルトの「デル・コメンデ・タ－ク 臨床治療研究所」（ただし、これは『研究ラボ』小部門のみであり、『臨床病院・クリニック』は含まない）

・シュトゥットガルトの「デル・コメンデ・タ－ク株式会社 発送部門」

これらこそが、1924年10月1日付の効力をもって、スイスの「国際研究所株式会社（ Internationale Laboratorien A.G. ）」によって完全に買収され、「国際研究所株式会社 シュトゥットガルト分社」として1つの組織へと統合・再編された事業だったのです。

この買収に伴い、外部から招聘されていたヴァルター・ケーラー博士は契約終了となり、彼の代わりに、この新しく誕生したシュトゥットガルト分社の経営権を持つ総合最高責任者（ジェネラルマネージャー）として、デル・コメンデ・タークの総支配人（CEO）であったエミール・ラインハス（Emil Leinhas）が就任しました。

また、シュヴェービッシュ・グミュントの工場のトップには、新たに化学者のヴィルヘルム・ペリカン（Wilhelm Pelikan）（注：のちにヴェレダの製薬思想を確立する最重要人物の一人）が就任し、その一方で、シュトゥットガルトの研究ラボについては、それまでと変わらずヴィルヘルム・シュピースが指揮を執り続けました。

シュヴェービッシュ・グミュントにおいては、それまで続いていた製粉事業（ミリタリー等の不採算事業）が完全に撤退・廃止され、経営のすべてのウエイトが「医薬品および化粧品の製造」へと100%シフトされました。

なお、シュトゥットガルトの臨床病院をこの株式会社のなかに組み込むことについては、最初から完全に断念されていました。というのも、その直前に「商業的な利益（会社の経営）と、精神（霊）的な取り組み（医療の実践）との間を明確に分離する」という経営方針に従い、アルレスハイムの臨床病院を自分たちの株式会社の組織内から切り離して独立させる、という決定が下されたばかりだったからです。

〔フトゥールムとデル・コメンデ・タークなくして、ヴェレダは存在し得なかった〕

このようにして、幾重にも絡み合った無数の紆余曲折の道のりを経て、最終的に今日のヴェレダの姿が誕生することとなったのです。「フトゥールム」と「デル・コメンデ・タ－ク」は、自分たちが本来目指していた（社会有機体三分節化に基づく経済改革という）目標を完全に達成することはできず、企業全体としては解散の道を歩まざるを得ませんでした。

しかし、それにもかかわらず、彼らは一つの決定的な成果をこの世界にもたらしました。それこそが、「人智学的な認識に基づく医薬品の大規模な大量製造を、強固で広範な土台のうえに始動させた」ということなのです。

●ヴェレダはどのような方法で諸事業を買い取ったのか？
——贈与か、それとも買収か？——

「1921年から1924年にかけて、フトゥールムやデル・コメンデ・タークの株主たちの間で交わされた株式の贈与（寄付）があって初めて、国際研究所（ヴェレダ）はしかるべき研究所部門を、いわば無償で引き継ぐことが可能になったのだ」という意見が、巷ではしばしば主張されています。しかし、この見解は当時の「歴史的事実」とは一致していません。

事実として、様々な株式の贈与（寄付行為）が、結果として「フトゥールム株式会社」および「デル・コメンデ・タータク株式会社」の双方の倒産を回避させる原動力となったのは確かです。なぜなら、これら2つの企業の実際の「純資産価値」は、株式が贈与された時点において、もはや膨れ上がった株式資本の額には到底及ばない状態になっていたからです。

そして、もう一つの決定的な事実は、これらの株式の贈与は、国際研究所（ヴェレダ）に対して行われたのではなく、他でもなく「ゲーテアヌム協会」か、あるいは「ルドルフ・シュタイナー個人」に対して、信託財産として提供されたという点です。

したがって、これらの贈与は、国際研究所がフトゥールムやデル・コメンデ・タークの各製薬部門を何の手続きもなくそのままタダで引き継げる、というような形で作用したわけではありませんでした。

これらの贈与がもたらしたのは、あくまでも「事業譲渡価格の引き下げ」でした。そして、その価格の値下げが行われたことによって初めて、国際研究所には、これらの様々な事業（工場やラボ）を「自力で買い取る」という現実的な可能性が生じたのです。

この意味において、これは資産そのものの「贈与」と呼ぶことはできず、あくまでも「贈与によって可能になった買収価格の減額調停」と呼ぶべきものなのです。ただし、一般論としてこのように明確に言える事柄も、個々の具体的な取引の細部においては、当然ながらはるかに複雑に絡み合った様相を呈していたのです。

〔フトゥールム諸事業の買収（スイス部門の財務再建）〕

ヴェレダ――当時はまだ「国際研究所株式会社（ I.L.A.G. ）」――が敢行した一連の買収劇は、まず、イタ・ヴェーグマン博士の「臨床病院」と、フトゥールム社の「化学・製薬研究所」の買収から始まりました。

国際研究所は、これら2つの部門に対してそれぞれ20万スイスフラン（Fr. 200,000.-）を支払いました。その支払いは、1株500フランの「国際研究所（I.L.A.G.）株式」をそれぞれ400株ずつ交付するという形で行われました。その後、1924年3月25日に国際研究所が「清算手続き中のフトゥールム社（in Liq.）」を丸ごと買収した際、これらの株式の一部、すなわち、いまだフトゥールム社の手元（金庫）に残されていた284株が、再び国際研究所のポートフォリオ（自己株式）へと戻ってきました。

この戻ってきた株式のパッケージは、売却への奔走にもかかわらず、ごく一部しか外部へ再売却することができませんでした。これこそが、のちの1931年6月27日に、国際研究所が自社の株式資本を95万フランから75万フランへと、「20万フランもの資本削減」を決議しなければならなくなった大きな理由の一つでした。

実務上、これはおそらく次のように執行されました。フトゥールムの清算期に由来する「1株112.50フランのI.L.A.G.株式」を、企業の統合によって余剰となった「通常の1株500フランのI.L.A.G.株式」と交換し、その後に無効化したのです。このとき、計1760株（1株112.50フラン）と、4株（1株500フラン）が法律上、無効であると宣言されました。

これだけを見ると、国際研究所（I.L.A.G.）は最終的に、アルレスハイムの研究所を「ほぼタダ」で手に入れたかのように思えるかもしれません。しかし、それは表面上の錯覚にすぎません。なぜなら、フトゥールム社を丸ごと買い取るにあたり、国際研究所は「フトゥールム社が抱えていたすべての債務をも同時に引き受けた」という事実を忘れてはならないからです。

この負債の引き継ぎは、最終的に国際研究所にとって「途方もない巨額の負債」となってのしかかり、会社を自己破産の瀬戸際へと何度も追い詰めることとなりました。それは、フトゥールムの株式資本を（200万フランから100万フランへ、そして最終的に45万フランへと）2度にわたって容赦なく減資したにもかかわら

ず、です。ヴェレダが、このフトゥールム時代から引きずってきたすべての借金を完済するまでには、それから実に長い歳月を要することとなりました。

1929事業年度に一度だけ、いわゆる「面子のための配当（プレステージ・ディビデンド）」として2.5%の配当金が出された例外を除けば、ヴェレダが企業として安定し定期的な配当を行えるようになったのは、ようやく1950事業年度になってからのことでした。

この「フトゥールムの資本（株式価値）の最初の切り下げ」のイニシアチブを執ったのは、イタ・ヴェーグマンとエドガー・デュルラー（Edgar Dürler）でした。1923年1月20日付でフトゥールムの株主たちに送られた個人的な書簡の中で、彼らは株主に対し、自分たちの持つフトゥールムの持ち株を国際研究所の株式へと交換するよう呼びかけました。ただし、それは「50%の損失（価値が半分になること）」を伴うものでした。

1923年4月4日の定時株主総会において、この提案は株主たちによって承認されました。すなわち、従来の「1株1000フランのフトゥールム株式」に対し、株主は「1株500フランの国際研究所株式」を1株だけ受け取ることになったのです。注目すべきは、すでにこの時点において、一部の株主たちがみずからの資本持分を、ルドルフ・シュタイナーに対して「信託財産」として無償で委ね始めていたという点です。

当初はその深刻さを誰も信じようとしませんでしたが、その1年後、真実は完全に白日の下に晒されました。あれほど大胆な切り下げ（50%減資）を行ったにもかかわらず、フトゥールムの株式は「いまだ過大評価されている（まだ会社が赤字である）」ということが明白になったのです。

1924年2月25日、株主たちに宛てた個人的な書簡の中で、ついにルドルフ・シュタイナー自らが介入しました。彼は株主たちに対し、もしそれぞれの経済的状況が許すのであれば、すでに半分に切り下げられているそのフトゥールム株式を、他でもなく「ゲーテアヌム協会」へと無償で譲渡（寄付）してほしい、と懇願したのです。

この寄付があれば、国際研究所の負債を劇的に減らすことができ、同時に、イタ・ヴェーグマンの臨床病院を「人智学協会」の組織内へと財政破綻させることなく無事に組み込むことが可能になる、という大義がありました。そしてもう一つ、極めて重要なポイントがありました。それは、この寄付によってゲーテアヌムが受け取った株式の配当金権利を「放棄」し、それをフトゥールムの破綻によって生活に困窮している株主たちへの「経済的支援」として還流させるという、現実的な道が開ける、ということでした。

シュタイナーが、気が進まないまま、重い心を引きずるようにして執筆したこの寄付への呼びかけは、大成功を収めました。

最初の段階で、計123万5320フラン（Fr. 1,235,320.-）相当の株式が無償で寄付され、続く数年の間に、さらに当初の価値で計35万9000フラン相当の株式が追加で提供されました。ルドルフ・シュタイナー本人、および妻のマリー・シュタイナーもまた、自分たちの個人所有の株式をすべて無償で差し出しました。

これによって、さらなる「資本の容赦ない切り下げ」への道が法律上、開かれました。

1924年3月24日、フトゥールムの株主たちは再び「55%の減資」を決議し、これによって、当初の「200万フラン」あった株式資本は、わずか「45万フラン」へと縮小されました。

株主たちは、かつての「1株1000フランのフトゥールム株式」に対して、最終的にはわずか「1株112.50フラン」の新しいI.L.A.G.株式を受け取るにすぎませんでした。つまり、彼らは自分たちが最初に投資した資本の「88.75%」を完全に失ったのです。

それにもかかわらず、1924年に行われたこれら一連の株式の贈与（寄付）は、自分たちの株式を手放さずに保持し続けた株主たちにとっては、結果として「一定の資産価値の防衛（ Wertsicherung ）」を意味していました。

なぜなら、もしもこれらのシュタイナーやゲーテアヌムへの株式の寄付が実行されていなかったならば、彼らの手元に残されたフトゥールム社における「残存持分」の価値は、それこそさらに低く完全に無価値に縮小してしまっていたはずだからです。そして、そうなっていれば、国際研究所（ヴェレダ）の側としても、フトゥールム社を買い取って引き継ぐことなど夢にも考えることはできず、同社の倒産を回避することは到底不可能だったからなのです。

〔デル・コメンデ・ターク諸事業の買収（ドイツ部門の財務再建）〕

ドイツの「デル・コメンデ・ターク（来るべき日）」社の場合も、事情はスイスのフトゥールムと類似していましたが、全く同じというわけではありませんでした。というのも、当時のドイツを襲った「破壊的なハイパーインフレ」によって、事態ははるかに不透明で混沌としたものになっていたからです。

ドイツが「金マルク」を導入する以前、同社の株式資本の額面価値は1億4000万マルク（紙幣マルク／ Papiermark ）に達していましたが、インフレの末期（1923年末）において、この数字は「完全に無価値（ゼロ）」であることを意味していました。しかし、通貨改革（デノミネーション）が行われた後の新通貨体制において、これらの株式はリセットされ、どうにか計140万ライヒスマルク（ RMk. ／ライヒスマルク ＝ 金マルク）という総資産価値を取り戻していました。

ここでもまた、ルドルフ・シュタイナー自らが、「臨床治療研究所」を含む一連の「精神的（霊的）な諸事業」をデル・コメンデ・タークの組織体系から切り離して救い出すために、株主たちへ株式の贈与（寄付）を募るという、極めて気の進まない不名誉を伴う役割を引き受けなければなりませんでした。

彼は今回、書面ではなく、1922年7月15日に開催された「デル・コメンデ・ターク第4回定期株主総会」の事前準備会において、株主たちへ口頭で直接熱烈に呼びかけました。フトゥールムのケースでは、単に一般的な寄付の呼びかけにとどまっていたのに対し、今回のシュタイナーは、明確な数字を目標値として提示しました。彼は、精神的な諸事業を無事に救い出すためには、当時の紙幣価値で約3500万マルク（＝ 新通貨で35万ライヒスマルク）に相当する株式のパッケージを、株主たちが無償で手放すことが絶対に不可欠である、と訴えたのです。

シュタイナー自身がまず模範を示し、みずからの個人所有の株式をすべてこの大義のために差し出しました。彼のこの悲痛な呼びかけに応じ、最終的に計3136万6000マルク（＝ 31万3660ライヒスマルク）にのぼる株式が、彼の信託口座へと無償で提供されました。目標額にはわずかに届かなかったものの、これによって、「科学研究研究所（ヴァルドルフ学校内の暫定ラボ）」というただ一つの例外を除き、大半の「精神的な企業（ラボや工場）」を、単なる消滅に追い込むことなく、無償譲渡あるいは買収という形でデル・コメンデ・タークから切り離して救い出すことに成功したのです。

こうして、シュトゥットガルトとシュヴェービッシュ・グミュントの双方にあった「臨床治療研究所」の2つの研究所（ラボ）、および（グミュントの）「化学工場」、そしてシュトゥットガルトの「発送（販売）部門」は、スイスの国際研究所（ヴェレダ）によって正式に買い取られることとなりました。

国際研究所は、デル・コメンデ・タークのこれら3つの（実質的には4つの）部門に対し、総額10万スイスフラン（ Fr. 100,000.- ）を支払いました。ただし、シュトゥットガルトとシュヴェービッシュ・グミュントの「土地（敷地）」そのものについては、引き続きデル・コメンデ・タークの所有（財産）として手元に残されました。

この買収価格（10万フラン）のうち、3万フランについては「現金」で支払われました。そして、残りの7万フランについては、国際研究所がデル・コメンデ・タークに対して持っていた「債権（貸付金）」との相殺（ Verrechnung ）によって決済されたのです。

というのも、デル・コメンデ・ターク社は1924年4月1日付の契約で、フトゥールム社の清算財産（破産管財組織）に由来していた「オルガ株式会社（ Orga A.G. ）」の株式を100%引き受けており、それを――おそらく同年のうちに――ドイツの親会社であるベルリンの「オルガ有限会社（ Orga G.m.b.H. ）」へと譲渡していたからです。この複雑な株式の交換トレードは、ルドルフ・シュタイナーの同意のもと、エドガー・デュルラーの発案によって行われ、エミール・ラインハスが実務を指揮して実行されたものでした。

したがって、このドイツ（デル・コメンデ・ターク）の各部門の引き継ぎに関しても、「無償で手に入れた」などという話は全くの事実無根であり、当時エミール・ラインハスが「国際研究所にとって極めて有利な格安の条件下で買収できた」と語っていたとしても、それは厳格なビジネスとしての購入だったのです。

これらの株式の寄付によって可能となった「資本の切り下げ」の手続きは、これら精神的事業の買収がすべて完了した後の、1925年1月5日に開催された「デル・コメンデ・ターク臨時株主総会」においてようやく正式に執行されました。というのも、減資を行うためには、まず新通貨に基づく「金マルク貸借対照表」を厳密に作成せねばならなかったからです。

これによって、同社の資本金は140万ライヒスマルクから、わずか「46万6700ライヒスマルク」へと劇的に縮小されました。これは、株式を手放さずに最後まで残っていた株主たちにとっては、みずからの投資価値の「66.6%（3分の2）を完全に失った」という厳しい現実を意味していました。こうして、デル・コメンデ・タークの実際の純資産価値が、その資本金の額面上の数字よりもはるかに低くなってしまっていた、という冷酷な事実への会計（法務）上の最終処理が完了したのです。

〔根本的に見れば、一つの「奇跡」〕

全体として見渡すならば、当時の人智学的な経済企業を率いていた指導的な人物たち、何よりもヨセフ・ヴァン・レール（Josef van Leer）、エドガー・デュルラー（Edgar Dürler）、そしてエミール・ラインハス（Emil Leinhas）が――もちろん、ルドルフ・シュタイナーによる最も身を削るような側面からの全面支援があったからこそですが――、これら一連の買収によってヴェレダの前に立ちはだかった、あの計り知れないほど巨大な財政的困難（巨額の負債とハイパーインフレの嵐）を最終的に克服することに成功したというのは、まさに一つの「奇跡」と見なされるべき事象です。

しかしそれと同時に、フトゥールムとデル・コメンデ・タークの双方の、そして忘れてはならないのは、国際研究所（ヴェレダ）そのものの倒産（破産消滅）をも未然に回避することができたのは、他でもなく、自らの富を差し出して無償の贈与（寄付）を行い、多大な権利を自発的に放棄した、「数え切れないほどの無名の株主（投資家）たちの偉大なる功績（自己犠牲）」によるものとして評価されなければならないのです。

●ヴェレダの名称はどのようにして決まったのか？

〔ヴェレダ（WELEDA）の名称の由来〕

「ヴェレダ株式会社（ Weleda A.G. ）は、かつての創設期には全く別の名前で呼ばれており、最終的に1924年になって、ルドルフ・シュタイナーから『ヴェレダ』という名前を授けられたのだ」というエピソードが、公式の歴史として語られがちです。しかし、この描写もまた、実際の歴史的事実を「部分的に」しか伝えていません。

・最初の社名

確かに、ヴェレダが初期の段階、すなわち1922年11月21日に最終的な登記を完了した時点において、現在とは全く異なる別の名前を持っていた、というのは事実です。その名は、「国際研究所および臨床治療研究所アルレスハイム株式会社（ Internationale Laboratorien und Klinisch-Therapeutisches Institut Arlesheim A.G. ）」というものでした。この名称で、会社は商業登記簿へと正式に登録されたのです。

この長いダブルネームは、最初期の段階において、アルレスハイムにある「臨床病院（クリニック）」と「研究所（ラボ）」の双方が、この新しい企業の中で1つの屋根の下へと統合されていたことに起因していました。「アルレスハイム」という地名の表記も、厳密に言えば正式な会社名の一部でしたが、日常のビジネスにおいては、この付記はほとんど省略されていました。

この新しい統合企業が、いかにしてこの最初の名前（国際研究所……）を冠することになったのかについて、オスカー・シュミーデル博士は自身の回想の中で次のように記憶しています。

「『国際研究所（ Internationale Laboratorien ）』という名前は、デンツラー氏（Herr Denzler）が発案したものでした。シュタイナー博士に一切相談することなく、自分たちだけで決定してしまったのです。なぜなら、自分たちには他に何一つ良いアイデアが思い浮かばなかったからです。」

しかし残念ながら、シュミーデル博士のこの回想は「記憶違い」です。

1922年の3月末頃に作成された、ルドルフ・シュタイナーの直筆の原稿――設立趣意書のいわば「最初の草案」――が遺されており、その中でシュタイナーはすでに、「アルレスハイム国際臨床治療研究所および研究所株式会社（ Internationales Klinisch-Therapeutisches Institut und Laboratorien A.G. zu Arlesheim ）」を誕生させることが絶対不可欠である、と自ら明確に語っているのです。

その後、4月10日付の一般公募のための設立趣意書において、シュタイナー本人も署名した上で、現在の公式な最終名である「国際研究所および臨床治療研究所株式会社」という社名が歴史に登場しました。したがって、この命名はシュタイナーの100%完全な同意のもとで行われたものでした――そうでなければ、彼が自らその設立趣意書に署名するはずがありません。シュタイナーが、自らの名前を懸けて背後から全面サポートしている企業の命名という最も重要な決断を、当時どちらかといえば外部の実務的な人物にすぎなかったデンツラーのような個人の手にそのまま委ねて放置したなどということは、そもそも絶対に考えられないことなのです。

さらに、この社名において「国際性」が強烈に強調された背景には、人智学の経済アソシエーションの確固たる「伝統」への回帰という意味もありました。というのも、前身であるフトゥールム社（ Futurum A.G. ）の正式な副名称が、他でもなく「精神的および経済的価値の国際的促進のための経済協会」だったからです。彼らが最初から見据えていたのは、単なる一国の枠組みにとどまらない「全世界（グローバル）」を舞台にした事業活動でした。人智医学の医薬品を、まさに「世界中へ、あまねく普及させること」こそが彼らの究極のゴールだったのです。

1923年3月9日、国際研究所は、ルドルフ・シュタイナーが彼らのために自らデザインした「ロゴマーク（商標）」の法的保護（商標登録）を執行しました。それは、「治療用調剤および化粧品（医薬品とコスメ）」のための聖なるシンボルマークでした。

その後、1924年7月1日付の効力をもって臨床病院（病院部門）がこの株式会社の組織から切り離されて独立したことに伴い、アルレスハイムの研究所は単に「国際研究所アルレスハイム株式会社（ Internationale Laboratorien Arlesheim A.G. ）」と呼ばれるようになりました。これもやはり日常の実務においては、短

縮された形のなかから「アルレスハイム」という地名の表記が省略され、単に「国際研究所株式会社（Internationale Laboratorien A.G.）」として通用していたのです。

〔海外における社名を巡るトラブル（改名への引き金）〕

しかし残念ながら、この「国際研究所」という名称のせいで、のちに法的なトラブルが発生することとなりました。それは主に、アングロサクソン圏（英語圏）へ進出して足場を固めようとする奔走のなかで起きました。

早くも1923年7月には、アメリカに設立した最初の現地法人（子会社）である「インターナショナル・ラボラトリーズ社（International Laboratories Inc.）」の名称を、急遽「アメリカン・アルレスハイム・ラボラトリーズ社（American Arlesheim Laboratories Inc.）」へと改名しなければならなくなりました。まったく同じ名前で商業活動を行っている会社がすでに現地に存在していたことが、その明らかな理由でした。

同様のトラブルはイギリスでも発生しました。イギリス国内では、1924年6月に「インターナショナル・ラボラトリーズ社（International Laboratories Co. Ltd.）」という名の現地企業が、その名称の使用に対して「裁判上の異議申し立て」を起こしたのです。当時イギリスには、まだこの名称で活動しているヴェレダの子会社は存在しておらず、単にアルレスハイムの親会社の社名を英語に翻訳して使用していたにすぎなかったにもかかわらず、です。

この問題は、イギリスの人智学者ダニエル・ダンロップ（Daniel Dunlop）が、まさにイギリス現地法人の立ち上げを本格化させようとしていた矢先だったため、事態はさらに緊迫したものとなりました。さらに、オランダも同様の現地法人の創設に向けた動きが進行中でした。

一体、これらの海外企業をどのような名称で設立するべきなのか？関係者たちは、ルドルフ・シュタイナーにアドバイスを求めました。

そして、1924年7月11日から24日にかけてオランダのアーンヘム（Arnheim）で開催された「人智学・教育学大会」の会期中、親しいごく少数の友人たちの集まりのなかで、ルドルフ・シュタイナーが初めて『ヴェレダ（Weleda）』という名前を口にしたのです。それは、古代ゲルマンの伝説的な「癒やしの女司祭（巫女）ヴェレダ（Weleda）」の神聖なる活動を見据えての命名でした。

少なくとも、当時そのミーティングの場にみずから同席していたと証言する医師ウィレム・ゼイルマンス・ヴァン・エミホフェン（Dr. Willem Zeylmans van Emmichoven）は、私たちにそのように語り伝えています。

そして、そのすぐ後――1924年8月9日から22日にかけて開催された「第二回国際サマースクール」の会期中――、オスカー・シュミーデル博士の記憶によれば、シュタイナーはイギリスのダンロップに対しても、イギリス現地法人の名称としてこの『ヴェレダ』という名前を採用するように直接アドバイス（提案）したに違いないのです。

解決策：
すべての現地法人（子会社）のための新名称、
そして同時にすべての製品のための総合ブランド名

海外におけるこうした社名を巡るトラブルと、それに伴う現地法人設立に関する諸問題によって、アルレスハイムの経営陣、おそらくは特にヨセフ・ヴァン・レールもまた、この名称問題と本格的に向き合わざるを得なくなりました。

さらにこの問題は、本社の正式な社名である「国際研究所（インターナショナル・ラボラトリーズ）」という言葉が、そもそも製品ラインナップ全体の「ブランド名」として全く適していなかった、という点でも浮き彫りになっていました。例えば、「『フトゥールム』ヘアトニック」と呼ぶ分には何の問題もありませんでしたが、「『国際研究所』マウスウォッシュ」という名前で広告を出すことなど、およそ不可能な話だったからです。

こうして、ルドルフ・シュタイナーがオランダやイギリスで提示していたあの提案が、正式に拾い上げられることとなりました。それが実行されたのが、シュタイナーもゲストとして出席した1924年9月7日の取締役会の席上でした。

ヨセフ・ヴァン・レールは、今回の議題について「私たちのすべての姉妹会社（現地法人）およびすべての製品に対して共通で使用できる、たった一つの名称を獲得することである」と言い表しました。これに対し、ルドルフ・シュタイナーから、「医学だけでなく、他の多くの事柄にも通じていた古代ゲルマンの卓越した個性・精神である『ヴェレダ（ Weleda ）』」の名前をこれに採用してはどうか、という提案がなされ、満場一致で承認されたのです。

こうして、人智学的な医薬品および化粧品の「根幹となる共通ブランド名」として「ヴェレダ」の名前が使用されることになりました。この名称は、1924年9月20日にドイツにおいて、そして1924年9月25日にスイスにおいて、それぞれ商標権による法的保護が執行（商標登録）されました。

この取締役会の決議に基づき、「ヴェレダ」という言葉は、これから世界中に設立していく予定の様々な現地法人（子会社）の社名としても使用されるべきである、と定められました。しかし、スイスの親会社およびドイツの分社（シュトゥットガルト分社）そのものの社名については、この時点では全面的な改名はせず単なる「名称の追加」のみに留める予定でした。

すなわち、親会社は将来的に、各地の国別の「ヴェレダ」企業を統括する持株会社であり、かつ「ヴェレダ」製品の製造元であることを示すために、「国際研究所ヴェレダ・アルレスハイム株式会社（ Internationale Laboratorien Weleda A.G. Arlesheim ）」と名乗る予定であり、ドイツの分社についても同様に「国際研究所ヴェレダ株式会社 シュトゥットガルト分社」とする予定だったのです。

しかし、たとえ単なる補足（追加）であっても、社名の変更を法的に有効なものとするためには「定款の変更」が必要不可欠であり、これは（取締役会ではなく）株主たちによる「株主総会」での決議が絶対条件となります。

そして、ここに驚くべき史実があります。そのすぐ後に開催された1925年5月2日の次期定期株主総会において、この社名変更の問題は「一切議題に上ることさえなかった」のです。したがって、この時点では社名変更の商業登記簿への登録申請も行われませんでした。

なぜ最終的にこの手続きが見送られてしまったのか、その理由は未だ解明されていません。おそらく、1925年3月末にルドルフ・シュタイナーがこの世を去った後、経営陣の意思が変わり、別の解決策を模索しようとしたのかもしれません。

しかしながら、取締役会が決議した「もう一つの第2のプラン」の方は、続く数ヶ月の間に着実に現実のものとなっていきました。1924年の12月以降、イギリスとオランダにおける現地法人（子会社）の設立手続きが次々と開始されたのです。そして、これら2つの子会社こそが、その歴史において、その社名の全体に『WELEDA（ヴェレダ）』の文字を初めて100%完全に冠した、地球上で最初の2つの製薬企業となったのです。それが、オランダの「ヴァンダルマートシャハパイ・ヴェレダ（ Handelmaatschappy Weleda ／ヴェレ

ダ交易会社）」であり、イギリスの「ザ・ブリティッシュ・ヴェレダ社（ The British Weleda Co. Ltd. ）」だったのです。

〔親会社への「ヴェレダ」の命名〕

1924年9月7日の取締役会から間もないうちに、経営陣の間である種の「方針転換（再考）」が行われたのは明らかでした。現地法人（子会社）だけでなく、スイスの本社およびシュトゥットガルトとシュヴェービッシュ・グミュントにあるドイツの分社についても、すべて共通の統一された名前「ヴェレダ」を使用したほうがはるかに簡潔である、という結論に至ったのです。

親会社についても、それまでのどちらかと言えば無機質でお堅い社名を、より表現力豊かな（精神的な意味を持つ）名称へと置き換えるべきだというアイデアが、社内で完全に勝利を収めました。

しかし、この決定をスイスとドイツの本社レベルで実現することは、名称権（商標法）の法的な理由から、決して一筋縄ではいきませんでした。

のちにドイツのヴェレダ社のプロクリスト（支配人・総支配人代理）となったフリッツ・ゲッテ（Fritz Götte）が、かつてヨセフ・ヴァン・レールから聞いた言葉として回想しているところによれば、その原因は「スイスやドイツ国内に、すでに『ヴェレダ』というブランド名で自転車のサドル（ Fahrradsättel ）を製造・販売している先発企業が存在していたこと」と結びついていたのでしょうか？ 確かなことは今となっては分かりません。

さらに、当時のドイツ・ヴェレダの代表であったエミール・ラインハスの書簡によれば、ベルリンにあった高名な「美容サロン」からも、特定の商標権に関する異議申し立て（抗議）が突きつけられていたことは間違いありません。

そして、この社名変更の手続きを巡って何よりも驚くべきなのは、1925年から1928年にかけての取締役会の公式な議事録のなかに、この社名変更に関する記述がただの「一言」さえも全く登場しないという事実です。

それにもかかわらず、この改名はどこかのタイミングで最終的に決議されていたに違いありません。次に現れる確実な歴史の足跡は、1928年10月3日です。この日、まさに親会社の社名を正式に「ヴェレダ（ Weleda ）」へと改名することを主要議題とした「臨時株主総会」が招集されたのです。

出席した株主たちによって、この社名変更は無事に承認されました。しかし、あろうことか登記所から、この決議は「法律上、無効である」という非情な宣告をされてしまったのです。会社が保有していた「自社株」に対してまで、誤って議決権を行使させてしまっていたという、法務上の痛恨のミスが原因でした。

そのため、この株主総会は1928年12月10日に最初からやり直さなければならなくなりました。この再度の総会において、全会一致で会社への新名称（WELEDA）の導入が正式に可決されたのです。

この決議が法的な執行力を持ったのは、スイスの商業登記簿に正式に登録された1929年1月24日、および（シュトゥットガルト／シュヴェービッシュ・グミュントの分社のために）ドイツの商業登記簿に登録された1929年2月16日のことでした。

したがって、この1928年12月10日こそが、今日の「ヴェレダ株式会社（ Weleda A.G. ）」の真の『命名記念日』として見なされるべき日なのです。

〔歴史上の「ヴェレダ（Weleda）」〕

1924年9月7日の取締役会において、ルドルフ・シュタイナーは「ヴェレダ」という存在について、医学（治療芸術）だけでなく、他の多くの事柄（高次の智恵）にも通じていた古代ゲルマンの卓越した個性・霊格であったと語りました。

この歴史上のヴェレダについて、主に私たちに伝えているのは、古代ローマの歴史家タキトゥス（Tacitus）です。彼女はキリスト紀元第1世紀（西暦1世紀）、ゲルマンの部族であるブルクテリ族（Brukterer）の領土内を流れるリッペ川のほとりにおいて、特別な霊視（透視）能力と、治療の才能を授かった、最高度に高潔で尊敬を集める女性として暮らしていました。

彼女がローマ帝国に対するゲルマンの抵抗運動の「精神的（霊的）な中心地」として機能していたのか、あるいは、どちらかと言えば（ローマとゲルマンの間を）「媒介（仲介）する調停者」としての役割を担っていたのかについては、歴史家たちの間でその評価のウエイトが分かれています。

ローマに対する第2回の蜂起が失敗に終わった後（西暦77年または78年）、彼女は最終的に捕虜としてローマへと連行されましたが、現地では非常に「名誉ある扱い」を受けたと言われています。彼女は西暦80年頃にその生涯を閉じるまで、ローマからさほど遠くない古代都市アルデア（Ardea）にある神殿の聖域において、その活動を継続していた可能性があるのです。

その一方で、この特定の卓越した一人の女性個人（巫女ヴェレダ）の存在とは別に、一部のゲルマンやケルトの部族の間では、「ヴェレダ」という名称そのものが、広く一般に「イニシエーションを受けた女性」、すなわち「女預言者（ Seherinnen ／霊視能力を持つ女性）」を指す一般的な尊称であった、という見解も提唱されています。

この名前が持つゲルマン語およびケルト語の語源が、まさにその事実を指し示しています。この言葉が意味しているのは、他でもなく「霊視する女性」、「詩を紡ぐ女性」、「多くの智恵を知る（博識な）女性」、「神秘に満ち溢れた女性」、そして「賢き処女」なのです。

そして、かつてのこうした「諸々のヴェレダ（Weledas）」たちは、救いや助けを求めてやってくる人々に対して、神聖なる助言（神託）を授けていました。

「人類に奉仕すること」――これこそが、他でもなく今日の「ヴェレダ株式会社（ Weleda A.G. ）」が掲げている明確な企業理念の一つです。この意味において、「ヴェレダ」という名称は、この企業にとってまさに完璧に選ばれた名前であると言えます。同社は、この古代の気高き「女性治療者たちの伝統」の精神を現代へと蘇らせて固く結びつけ、それを新しい未来の時代へと引き導いていこうとしているからです。ヴェレダ株式会社は、自らがこれほどまでに現代にふさわしい素晴らしい社名を授かっているという事実に、大いなる歓びと誇りを感じてよいはずなのです。